

第2ミニシンポジウム

学生とともに進めるFD

● 報告者

- 梅村 修 (追手門学院大学国際教養学部 教授／教育研究所 所長)
大崎 雄二 (法政大学社会学部メディア社会学科 教授)
服部 憲児 (大阪大学大学教育実践センター 准教授)
平岡 聡 (京都文教大学臨床心理学部 教授／共通教育担当 部長)
学 生 (立命館大学、追手門学院大学、法政大学、大阪大学、京都文教大学)

● コーディネーター

- 木野 茂 (立命館大学共通教育推進機構 教授)

● 概要

FDは大学の組織的な教育改善の取り組みの総称であるが、その大学の中でFDを担う主体は第一に教員であり、最近では職員も大きな役割を担っている。しかし、大学の中の重要な構成員であり、教育を受ける当事者の学生もFDの主体と言えるのではないかと、2年前のFDフォーラムで初めてこのテーマで分科会を行った。その時の分科会では、学生とともに進めるFDという発想について参加者から強い賛同を得ただけでなく、報告者の立命館大学学生FDスタッフからの「学生FDサミット」の提案について大きな期待が寄せられた。

それから2年の間に、学生FDサミットは年2回開催されるようになり、学生によるFD活動に取り組み始めた大学はいまや30大学にも上っている。

今回はこれらの大学の中でもとりわけ活発な活動を続けている4つの大学から学生も含めて報告をいただき、学生とともに進めるFDとはいかなるものか、その意義と展望について、参加者とともに考えたい。

【第2ミニシンポジウム】

学生とともに進めるFD

参加人数 130名

報告者 梅村 修（追手門学院大学国際教養学部 教授／教育研究所 所長）
 大崎 雄二（法政大学社会学部メディア社会学科 教授）
 服部 憲児（大阪大学大学教育実践センター 准教授）
 平岡 聡（京都文教大学臨床心理学部 教授／共通教育担当 部長）
 村山 孝道（京都文教大学教務課 係長）
 学 生（立命館大学、追手門学院大学、法政大学、大阪大学、京都文教大学）
 コーディネーター 木野 茂（立命館大学共通教育推進機構 教授）

1 ミニシンポジウムのねらい

「学生とともに進めるFD」というテーマは2年前の第14回FDフォーラムの分科会が初めてであるが、その後、大きな進展を見せているので、この間、特に活発な活動を行っている4大学から学生とともに報告をもらい、今後の課題と展望を考えたいというのが今回の趣旨である。

2 ミニシンポジウムの概要

最初に木野から第14回FDフォーラムの分科会と以後の経緯を紹介し、本日の参加者の所属大学・機関が110に達したことを報告した。（下記参照）

北海道：旭川工業高等専門学校、小樽商科大学、札幌学院大学、道都大学、北海道薬科大学

東北：会津大学、秋田大学、岩手県立大学、羽陽学園短期大学、仙台青葉学院短期大学、八戸工業大学、福島大学、山形大学

関東：神奈川大学、共立女子大学、恵泉女学園大学、皇學館大学、国際医療福祉大学、駒沢女子大学、相模女子大学、作新学院大学、静岡県西部高等教育ネットワーク会議、芝浦工業大学、上智大学、聖隷クリストファー大学、専修大学、創価大学、玉川大学、つくば国際大学、帝京短期大学、東海大学、東京医療保健大学、東京工業大学、東京慈恵会医科大学、東京農業大学短期大学部、東京理科大学、東洋大学、常磐大学、獨協大学、日本体育大学、日本大学、日本大学通信教育部、日本薬科大学、浜松医科大学、文京学院大学、法政大学、



明治学院大学、立教女学院短期大学、早稲田大学、日経リサーチ、文部科学省

中部：愛知大学、愛知教育大学、愛知県立大学、愛知淑徳大学、大垣女子短期大学、鈴鹿医療科学大学、清泉女学院大学、敦賀短期大学、富山大学、中日本航空専門学校、長野大学、南山大学、日本赤十字豊田看護大学、日本福祉大学、福井工業大学、松本大学、松本大学松商短期大学部、名城大学、明倫短期大学

近畿：追手門学院大学、大阪大学、大阪工業大学、大阪国際大学、大阪樟蔭女子大学、大谷大学短期大学部、関西外国語大学、畿央大学、京都外国語大学、京都学園大学、京都光華女子大学、京都産業大学、京都造形芸術大学、京都文教大学、近畿大学、近畿大学豊岡短期大学、帝塚山大学、同志社女子大学、同志社大学、三重中京大学、桃山学院大学、立命館大学

中・四国：岡山大学、岡山理科大学、高知学園短期大学、高知工業高等専門学校、高松大学、比治山大学、広島経済大学、広島修道大学、福山市立女子短期大学

九州・沖縄：沖縄国際大学、北九州市立大学、久留米大学、長崎国際大学、福岡大学、福岡女学院大学、福岡女子短期大学、名桜大学

上記の大学のうち学生 F D の動きがみられる大学はまだ 20 くらいであり、それも現在は西側の大学が多いのに対して、当日の参加者の所属大学・機関は明らかに全国に広がっており、学生 F D に対する関心が高まっていることがこれからもうかがえた。

ついで、学生 F D サミットを始めた立命館大学の学生 F D スタッフ(太田郁磨、山西悠介、古川みずき、前田裕介)から、これまでの 3 回(2009.8、2010.2、2010.8)の学生 F D サミットの様子が紹介された。以下は当日発表スライドからの抜粋である。

学生 F D サミットの構想

「他大学を知る、自大学を見直す、三位一体で進める」

学生 F D サミットのコンセプト

「大学を変える、学生が変わる」

学生が大学(授業、教育、学生生活)をより良く変えるために自由に意見を言える機会を作ること、学生の視点で進める「学生 F D」を全国の大学に広めたい

学生 F D サミットの特徴

- * 学生だけ、教員、職員だけではなく、「学生と教員、職員の三位一体」である
- * 年度内に 2 回開催することで、一度きりのイベントではなく、持続的な効果のあるものにする
- * 全国の大学が参加するため、同じ目標に取り組む多くの仲間ができる
- * 2009 夏から 2010 夏にかけて参加者が倍増、学生 F D に取り組む大学も 5 倍にも増えた
- * これを記に、サミット外の場においても、大学間の交流が始まっている
- * サミットから得たものを、実際にそれぞれの大学の中で、どのようにして学生 F D 活動として実践していくかが今後の課題

その後、今回の主報告である 4 大学からの報告に移り、それぞれ教職員・学生から 35 分の報告の後、10 分の質疑応答が行われた。

各大学の報告については別途、詳細な報告があるので、ここでは要点のみを記す。

法政大学

(教員：大崎雄二、学生：岡田拓也・田所健太郎)

最初に、4 回目の学生 F D サミットが初めて立命を離れ、この F D フォーラムの翌週に法政大学で開かれるので、その紹介が岡田氏からあった。

次いで、大崎氏と田所氏より社会学部における学生参加型教学改革の取り組みと今後の課題が紹介された。

追手門学院大学

(教員：梅村修、学生：山下貴弘、久川尚恵、赤尾辰也、三上雄輔)

梅村氏より、教育研究所が組織している追手門学院大学の学生 F D スタッフの様々な活動の現況が紹介された後、学生側、教職員側双方の今後の課題が示された。

次いで、学生 F D スタッフの久川氏から、学生から見た学生 F D の意義と課題が話された。

大阪大学

(教員：服部憲児、学生：岡部誠、菱田伊駒)

服部氏より、大学教育実践センターのイベント「学生・教職員懇談会」から始まった「パンキョー革命」の活動と課題についての報告があり、次いで、岡部氏より仲間を増やして全学規模での F D を展開したいとの力強い発言があった。さらに菱田氏より、「ワニバス(双方向型シラバス)」という取り組みについて、現況と課題が紹介があった。

京都文教大学

(教員：平岡聡、職員：村山孝道、学生：山田博貴)

村山氏より、京都文教大学での F S D 活動が始まった経緯とその後の活動の概要について紹介があり、次いで平岡氏より F S D 活動の具体例として自校史「京都文教入門」の授業改善と新入生向けの新企画「プロジェクト P R フェスタ」の報告があった、さらに学生の山田氏より F S D 活動に入ったきっかけや今後の活動の抱負についての話があった。

この後、約 1 時間、参加者からの質疑や意見をもとに総合討論を行った。

3 総合討論の概要

「しゃべり場」について

Q(高知工専・教員):どの報告でも「しゃべり場」というのがあったが、その良いところだけでなく、良くないところというか、うまくいかなかった例などがあれば知りたい。

A(京都文教・学生):良かったところは、今まで考えたことのなかったところまで視野が広がったことで、うまくいかなかった例は、オーバーヒートしてなかなかまとまらなかったり、2時間位しても終わらなかったりしたことがある。

A(法政・学生):少人数だから、お互いの意見をしっかり分かり合えてコミュニケーションが取れるところが良い。うまくいかなかった例は、教員がしゃべりすぎること。

A(追手門・学生):学生の意見が批判されてつぶされてしまうようなのは良くない。

A(阪大・学生):1回生でもとりあえず何かしゃべってみるという点では得がたい機会だと思う。ただ同じ問題を何回もしゃべるだけでは意味がないので、2回目からはもっと調べてからやらないと成長もないと思う。

A(立命・学生):教職員が入ってくれることの良さもある。学生だけでやっていると議論が堂々巡りになりがちだが、ある程度整理してくれるのが良い。もちろん、それが行き過ぎると議論になりにくくなるが。

C(木野):しゃべり場では教職員の立ち位置が問題で、学生を批判したり説教したりするのはやめて、アドバイザーに徹することが必要だ。しゃべりすぎないことも大事だが、逆に何も言わないのも学生にとっては不気味だ。とりあえず一度やってみて欲しい。

学生は忙しい

Q(恵泉女学院・教員):学生と何かやっていく上での課題は、学生がアルバイト、課題、ダブルスクールとか、とにかく忙しくて、やる気のある学生と集まろうと言ってもなかなか予定が合わないこと。今日報告した学生たちも、他にもいろいろやりたいことがあるはずだと思うが、どんなふうにいるのか?

A(法政・学生):自分でやりたい活動なら、時間を作ると思う。そこまでもってくるのが最初難しいと思うけど、やりたいと思っている学生は確実に自分たちで時間を捻出して集まってくる。興味を持った学生にどれだけやりたいと思わせるか、そのきっかけを作るのは難しいけど、それさえ乗

り越えれば。

A(追手門・学生):やりたいことを先にやっている。そういう段取りを自分で立てている。

生徒感覚の学生をどう変えるか

Q(札幌学院・教員):やりたいことが思ったのと違ったとか、何かうまく行かないとか、そういう消極的な休退学者やその予備軍の学生を学生F Dのようなところへ入れたいが、どうすればよいのか。阪大の岡部君も同じようなことを言っていたので、こうしたいなという意見があればうかがいたい。

A(阪大・岡部):休退学者だけでなく、大学の授業になかなか出てこない学生は少なからずいると思う。二つ言いたい。一つ目は、大学に入ってくるときに、この先生に習いたいとか、自分はこの学問をやりたいんだと思う学生が今どれほどいるかということを考えてほしい。今、大学の全入時代といわれて、ただ単に大学が通過点だと思って大学に来ている学生も多いというのは実態だと思う。大学の関係者は、そういう学生が多いというのをまず事実として受け止めてほしい。

二つ目は、中高までの教育を受けてきて、自分たちはまだ生徒だという感覚の学生が多いということ。今までは受験勉強とか、問題を解くというような勉強の仕方をしてきたから、解決するかどうかかわからないような問題に対して取り組む勉強の仕方をまだ知らないの、生徒感覚でいる人が多い。もし対策をするのであれば、生徒感覚でいたり、自分で勉強したいものがないという学生に、学問の面白さとかを教えるというのが特に初年次教育で必要ではないか。

C(木野):学生F Dサミットでも、来るのは2・6・2の上の2の人たちだと思う。しかし、学生なら授業には出てこなければならない。だから、まずは授業が基点であり、教室が実践の場だ。昨日のシンポジウムで、私は「学生とともに作る授業」というパラダイムシフトの話をしたが、「学生とともに進めるF D」はそれと一体だと思っている。学生F Dだけですべてが出来るはずがない。生徒感覚の学生にどう振り向かせるのか、それはまず教室で振り向かせることであり、それは教員の責任である。そのためには授業を変えなければいけないということだが、それを後ろから押してくれるのが学生F Dである。だから学生F Dは三位一体で進めなければならない。私はそういうふうに学生F Dの意義付けをしている。

学生FDを支える教職員は楽しそう

C(木野): 私たち教職員は、4年間をどう自覚をもって送るかを学生に考えさせる場を作る責任があるのではと思う。そういう場の一つとして学生FDというのは結構有効で、このわずか2年間だけでも予想以上に共鳴してくれる教職員・学生が各大学に広がった。昨日のシンポジウムで、去年の夏のサミットに参加された島根大の山田氏は、学生FDにかかわる教職員はみんな楽しそうで元気そうだが、教職員だけを相手にしているFDの教職員はみんなしんどそうだと語っていただいた。実際、今日報告していただいた方々も一様に「しんどいけども楽しい」と話されたと思う。

C(京都文教・平岡): 今回、京都文教入門の改訂を考えているとき、教員・職員・学生が全く同じ方向を向いていた。多分、そこへ参加した学生にとっても新鮮だっただろうし、私自身も楽しかったし、喜びみたいなものを感じたのを今でも鮮明に覚えている。

C(追手門・梅村): 私が自分の学生の頃を振り返ると、大学の授業を自分で変えてやろうなんて思ったこともない。それに比べて一緒にやっている学生たちは実に立派で、心から尊敬している。そういう学生とFD活動を続けられるということは非常に楽しいことだし、自分の成長にもつながっていると思う。

学生FDによる改善への道筋

Q(福岡大学・教員): シャベリ場等で出てきたアイデアが実現して改善されたというような実例があれば紹介してほしい。大きな大学であればあるほどなかなか難しいが。

A(阪大・服部): 実践センターはFDも担当するということになっているので、例えば専任の先生方にコミュニケーション用のシートを作って使ってくださいとお願いするところまではできるが、その先となると、なかなか大きな大学はすぐに動くとは限らないのが実情で、それはFD自体の課題だ。

C(岡山・教員): どう実現するのかを最も重視するなら、この活動を岡山型にすべきだ。立命型と違って、岡山大学は実現することを第一に考えて組織作りをした。例えば、学生発案授業は普通の大学では非常に実現困難だろうが、岡山大学ではすんなりと実現できるような仕組みを整えている。

C(木野): 岡山大学では正式の専門委員会の中に学生が委員として入っているの、学生スタッフの選出も保証され

るし、決めたことは委員会の決定として大学の上に上がっていく。それに対して、立命館大学や多くの大学では学生の主体的な活動を重視してボランティア型である。しかし、それを三位一体でやっている大学では、学生FDをサポートしているし、学生からの実現可能な提案はサポートしている部署の責任で実現に向けて努力している。梅村氏は学生FDを「橋渡し」と表現されたが、学生側と大学側との「橋渡し」はわれわれの責任だと自覚している。

最後に・・・

C(木野): 参加者の中でも学生FDをやっているところがあると思うが、何でもどうぞ。

A(岡山・学生): 岡山大では先ほどの話にあったように、委員会で決めて様々なFD活動を行っている。学外とのかかわりというイベントではi*Seeというのをやっており、学生と教職員によるグループディスカッションを通して三位一体で議論を深めていく良い場だと思う。今年度も9月に2日間かけてやろうと思っている。

A(獨協大学・教員): 私も前々から大学は学生が主体であろうと思っていたので、学生FDサミットやi*Seeに参加して、最近、私の外国語学部でトーク・ラウンジというのを始めたところである。全学的にどう広めていくかを今思案中である。

Q(明治学院大学・学生): 今、私も学生FD活動を始めようとしているが、いまひとつ次のステップ、行動する段階になかなか踏み入ることが出来ない。発表された学生の人たちは、どのようにしてその行動力を喚起させているのか、どのようにしてやる気を引き出しているのか。

A(追手門・学生): やっぱり可能性を見せてあげるることかなと思う。こういうことができるんだと、背中を見せることかな。先輩にあこがれましたって入ってくれた学生が、こんなことやっていいんですか、やれるんですかと言って、むしろ今度は向うから提案するようになってきた。

A(京都文教・学生): やっぱりやる気を出していくには、自分から積極的に動いていくということが大事だと思う。例えば他大学訪問に行ったり、こういう企画どうだろうというのを職員さんに提案したりとか、どんどん新しいことを見つけていくのが新たにやる気を出す秘訣だと思う。

A(阪大・学生): やっぱり、やってることを見せるということが一番早いと思う。先輩のやってることを見て、あ～すごいなと、それを真似しようとして。その次のステップである「考えて実践する」に進むところが難しいのかなと思う。

C(文科省・職員):今日は学生の人たちの非常に元気な取り組みを見せていただいて、とても楽しい会だった。今、大学は予算でも大変だが、学生は学費を払ってるのだから、その分、自分たちの成長のために使い倒していくという姿勢を貫いてほしい。そして皆さんが大学を出たら、大学というのは大変学ぶ価値があるところなんだということを、きちんと世の中の人たちに言ってほしい。

C(木野):今日は発表も討論も大変盛り上がり、非常に有意義な機会が持てたと思う。この後、来週に法政大学で学生F Dサミットがあるが、再来週には京都大学の大学教育研究フォーラムで学生F Dのラウンドテーブルを予定しており、6月の大学教育学会でも同じくラウンドテーブルを予定している。学生たちは学生F Dサミットで横のつながりを実現しているが、それをサポートする教職員の側の横のつながりもぜひ広げていきたい。そして学生F Dを教職学三位一体で大学教育改革を進める一つの原動力に育てていきたい。

4 総括

別添の各大学の報告を読んでいただければわかるが、それぞれの大学の特徴を生かした学生F Dの取り組みが学生・教員・職員の三位一体で見事に展開されている。今回の報告大学以外にも学生F Dに取り組み始めた大学は増えているが、大学の規模(学部数・学生数)や設置形態(国公私立)の違いなどにより、その活動の内容や方法も異なるだけでなく、始めてはみたものの様々な課題に直面し難航しているところもある。学生F Dのさらなる発展のためには、これらの経験を交流しながら互いに支え合う関係を作る必要がある。今回のミニシンポジウムがその一里塚になれば幸いである。

なお、このミニシンポジウムの翌週に開催予定であった法政大学での学生F Dサミットは前日に起こった東北大地震で中止になった。準備をしてこられた関係者の無念を察するに余りあるが、学生F Dサミット・2011夏は立命館大学で引き継ぐ覚悟である。また、今回の参加者やその近親者の中にも被災された方々がおられることと思うが、謹んでお見舞い申し上げたい。



追手門版 学生FDスタッフの活動 現況と課題

追手門学院大学国際教養学部 教授／教育研究所 所長

梅村 修

大学コンソーシアム京都 第16回 FD フォーラム
第二ミニシンポジウム 「学生とともに進めるFD」

追手門版 学生FDスタッフの活動 現況と課題

追手門学院大学 教育研究所
梅村 修

I はじめに

2部構成で報告したい。

まず、梅村が「追手門版 学生FDスタッフの活動 現況と課題」と題して25分ほど話す。次に、追手門学院大学・学生FDスタッフの久川尚恵さんから、FD活動に携わった率直な感想や意見を10分ほど語ってもらう。

梅村の発表と、学生の発表は内容が一部かぶっているが、教師が語る学生FD活動の現況と課題と、学生が語るそれとは、ディスコースが全く異なるので、聴き比べていただきたい。また、本日は、久川さん以外に3名の学生FDスタッフ（赤尾辰也君、山下貴弘君、三上雄輔君）が参加しているので、適宜、彼らにも意見や感想を振ってみたいと思う。

II 発足の経緯

追手門学院大学では、従来から、FD推進委員会、学長事務室などの教職員組織によって教学改革が進められてきた。たとえば、学生による授業アンケート、公開授業、学部単位のFD懇話会、GPAの導入、第三者機関による自己評価などだ。しかし、どうも目に見えた成果が表れない、手詰まり感を感じるようになってきていた。

そうした中、2007年に教育研究所では、岡山大学の橋本勝先生をお招きし、「学生発案型授業」についてご講演をいただいた。授業に学生が参画する、という発想に目から鱗が落ちる思いだった。おりしも、追手門学院は2008年に創立120周年を迎え、学長ビジョンの一つに、「学生中心の大学」が謳われた。そこで、当時、学長室調査役の任にあった梅村が、当時の副学長の諮問に答えて提言したのが「学生によるFD活動」の推進だった。幸い、「学生FD活動」は副学長の後押しをうけて、また、立命館大学という強力な先導者にも恵まれて、2009年5月、産声を上げることができた。

III 学院内における位置づけ

追手門学院大学・学生FDスタッフは、教育研究所の傘下にある。教育研究所は、大学に所属しているが、特別な予算の執行を伴わないかぎり、教授会や評議員会のしがらみにとらわれることがない。比較的自由に、企画を立案、実行に移せる組織である。学生FDスタッフの活動は、この教育研究所の所員会議の審議を経て行われ、予算の執行に関しても教育研究所の管理下にある。

IV 活動概況～成果と反省

追手門学院大学の学生 FD スタッフは、2011 年 3 月現在、名前を連ねているものが 18 名。その所属内訳は、経済学部 2 名、経営学部 3 名、社会学部 3 名、心理学部 9 名、国際教養学部 1 名の計 18 名である。

1、2 回生主体の若い組織で、現在、週 3 回の定例会議、不定期の緊急会議、さらに月 1 回の教育研究所の所員会議で議論を重ねている。学生 FD スタッフが練り上げている事業を次に羅列する。すでに、実施され成果の出たものもあれば、企画段階にとどまっているものもある。なかには、頓挫したまま、たな晒しにされている企画もある。ここでは、あえてすべてお目にかけようと思う。

1. 教員と学生の意見交換の場作り～追手門版「しゃべり場」

しゃべり場は学生 FD 活動の基軸になる取り組みである。方法としては、少人数によるグループディスカッションであり、目的は、正解を求めない、学生と教職員、三位一体の意見交換の場作りである。今まで、追手門学院大学・学生 FD スタッフは、相手を変え、またテーマを変え、何十回としゃべり場に関わってきた。

たとえば、教員、若手職員、学長、特定ゼミ生、他大学学生スタッフなどを招喚して、「こんな授業を受けてみたい」「授業アンケートは必要か」「どうして大学に来ているのか」「大学の施設・設備の問題点」「大学の教育と高校までの教育」「学生生活を充実させるには」「成績評価をどう思うか」「大卒ってなんだろう」などなど、さまざまなテーマで闊達な意見交換を行ってきた。

ところで、追手門のしゃべり場では、いつも開催に先立って、教職員と学生にいい含める心得がある。まず、教職員、とくに教員には「長話をしない」ことを肝に銘じてもらう。また、学生には、礼儀正しく言いたいことを言おうと呼びかける。

2. 意欲的な授業を展開する教員への取材・紹介～「研究室訪問」～教員インタビュー

「先生の専門分野は何が面白いのですか」。この率直な質問に大学教員はきちんと答えられるだろうか。本来、教員が没頭している最先端の研究は面白くないはずがない。研究室訪問とは、学生 FD スタッフが、余談の面白い先生、脱線が面白い先生、授業が生气にあふれている先生、発言が精彩に富んでいる先生などの研究室を訪問して「先生の研究を研究する」企画である。なお、このとりくみは、後述の「追大教員図鑑」に向けた取材活動の意味合いもある。

3. 授業に関する「アンケート調査」

2009 年度、教育研究所・秋のセミナーでは、教員向けの授業に関する意識調査（例：「やりやすい授業とは」「理想の学生とは」）と学生向けの授業に対する意識調査（例：「なぜこの授業を受けているのか」「授業の良い点、改善してほしい点」など）の結果を、教職員、一般学生に向けて報告した。

4. 「公開授業」への参加

追手門学院大学では、数年前から、学長事務室が有志を募り、公開授業日を定め、教職員の参加を促している。ところが、会議や授業や学内業務で多忙な教員が多く、参観者はほとんどいない。また、公開授業後には、授業を公開した教員を囲んで話し合いの場がもたれ、学内向けの通信も配付されるが、教員同士の、内輪の当たり障りのない議論にとどまりがちである。

もし、この公開授業に、志の高いFD学生が参画し、その後の話し合いの場にも加わってくれば、公開授業はもっとと有意義なものになるだろう。また、学生、教員双方の印象の違いや感想の違いが、授業改善のきっかけにもなるだろう。

ところが、壁は厚い。この企画は道半ばにある。

5. 「追大教員図鑑」の発行

追大教員図鑑とは、学生目線で編んだ、追手門学院大学の教員のデータファイル、追手門教員 Who's who のことである。どこの大学にも、研究者総覧や履修要項の類の冊子があり、学生の閲覧に供されている。ところが、そのような資料からは、いくら読みこんでも教員の素顔はなかなか見えてこない。したがって、履修登録やゼミ選びに際して、学生は「この先生について学びたい」という確証が得られないまま、授業に臨むことになりがちだ。

追大教員図鑑は、この弊を除くために、学生自身が知りたいことを羅列したフォーマットを作り、先の「研究室訪問」で取材し、その内容をビジュアルに、簡便な記述でまとめていく試みである。そして、できれば、紳士録のように、この図鑑に載ることが教員にとって一つのステイタスとなり、誇りともなるようにしていきたいと考えている。

6. Best Teacher Award の創設

FD 学生が、学友会組織「学生意識委員会」とともに、全学の学生対象に、「あなたにとって、追手門のピカーの先生を1人、ピカーの授業を1つ挙げて、どの点がピカーなのか記述してください」という全学アンケートを実施する。そして、学生から支持を集めた授業や担当教員を学生の手で表彰する。これが、Best Teacher Award である。

追手門学院大学では、以前から学生による授業アンケートが実施されている。ところが、ウェブサイト上でのアンケート方式が導入されてからというもの、回収率は1%にも満たず、すっかり形骸化していると言わざるを得ない。

また、回収率を上げてマークシート経由の統計上の数値からは、学生の本音はなかなか看取しづらい。学生にとって「よい大学の教師」とはどんな教師なのか、「よい大学の授業」とはどんな授業なのか。それを知るには丹念な記述、もしくは膝を交えての対話しかない。Best Teacher Award は、学内の強烈なねたみ、嫉妬を買いそうな企画だが、なんとか実施して学内の倦んだ気分の一石を投じたい。

7. 「学生発案型授業、注文授業、on demand 講義」実現に向けた取り組み

この企画はなかなか実行段階に至らない。まず、先の Best Teacher Award や追大教員図鑑が、学生が「だれに、どんな授業をお願いするか」の基本資料になるだろう。

8. 追大 FD 合宿の試み

みんなで寝食を共にする、同じ釜の飯を食う、ということは、仲間の紐帯を強める、昔ながらのよい方法である。2011 年 2 月、追手門学院大学 F D スタッフは、教職員を交えて、学生会館の 1 フロアを借り切って、「よく遊び、よく学ぶ」をモットーに、F D 合宿を試みた。まず、皆でたこ焼きパーティーを開催した。たらふく食べたあとは、恒例のしゃべり場、来る F D サミットやフォーラムの準備などに明け暮れた。

9. 学び論 C への参加

「学び論 C」とは、年末に、4 月、追手門学院大学に入学する予定の高校生を集めて、大学の学びについて考えてもらう全学的な企画である。各学部、各事務部署の長が入れ替わり立ち替わり登壇し、高校生むけに入門的な話をする。この企画に 45 分間時間をもらって、学生 F D が活動を紹介した。

10. 他大学の学生 F D スタッフとの交流～「学生 F D サミット」等への参加

追手門学院大学の学生 F D スタッフは、「他流試合」を好む。立命館大学衣笠キャンパスで行われた過去 3 回の「学生 F D サミット」、岡山大学で行われた i-see2010、そして関東圏で始めて行われた法政大学学生 F D サミットなどに参加して、これまでの取り組み紹介や、しゃべり場のコーディネーターや、シンポジウムの登壇者などを務めてきている。また、横浜国立大学の教員研修に呼ばれて先生方を前に成果を披露したこともある。

以上のように、相手やテーマを変えて「しゃべり場」を繰り返し、そこでの議論から新しい F D 企画を練り上げ、「研究室訪問」や「全学アンケート」等で取材活動をし、「追大教員図鑑」の刊行や「Best Teacher Award」として学内で成果を発表し、将来的には「学生発案型授業」へとつなげ、「学生 F D サミット」などで学外に成果を発信していく、こうした遠大な展望を持って日々活動している。

V 予算、施設、学内での波及効果

さて、教育研究所では、2010 年度から、この「学生 F D スタッフの活動」を新規事業の一つに据え、引き続き支援していくことになった。さいわい予算（200 万円）も認められた。また、中央棟の 2 階の全面ガラス張りの個室を、共用スペースとして確保することもできた。全学的な支援体制は着実に整いつつある。

また、大学内への想定外の波及効果もある。ひとつは、若手職員を中心とした SD 活動の活発化、二つ目には、学内研修（各種セミナー）の変化である。特に、後者は特筆すべき変化であった。従来の学内研修とは、著名な講師を呼んで講演を聞き、質疑応答を行うという、通り一遍のものがほとんどだった。それがここに来て、グループワーク、しゃべり場形式の導入が盛んになってきた。たとえば、広島大学のピアサポーターと本学の学習支援室のピアサポーターとの交流会、学生意識委員会の全学施設アンケートの発表会など、教育研究所の預かり知らぬところで、しゃべり場形式の研修が常態化しつつある。

さらに、授業改善とは別に、F D に取り組む学生の人間的な成長は目覚ましい。もともとと個性的であくが強い学生が、ずいぶん丸くなり、大人になった。願わくば、F D に関心

を持たない学生も、自らが大学の教育を変えていくという気概を持って、仲間に加わってもらいたいと切望する。

VI 広報活動

こうした自己の成長を実感する学生FDが増えたおかげか、最近、新規スタッフの募集キャンペーンが功を奏している。以前は、なかなか新入メンバーのリクルートができないでいた。「我笛吹けど、汝ら踊らず」で、学生FDは、学内で孤立感を深めていた。ところが、最近、とみに仲間づくりに成功しているのである。

その理由はいくつか考えられるが、まず、スタッフ募集のチラシやポスターを一新したことがあげられる。以前は「学生FD活動とは何か」に限られた紙面に満載していた。そのため“FD”という言葉そのものが判じ物めいて、伝播力を持たなかった。それを企画ごとのチラシに変えて、何種類か作って貼付した。たとえば『母校は一つでも、関わりは無限大』というキャッチフレーズを作って「他大学交流」を訴えたチラシ、また、『本を作りませんか』と「追大教員図鑑」編纂を訴えたポスター、『話す機会は足りているか』というキャッチで「しゃべり場」の意味を訴えたビラなどである。

また、大学のHPの「キャンパスレポート」に、学生FDスタッフの活動を、日替わり掲載するようにしたことも大きい。毎日かなりのアクセスがあり、学生FD活動に興味を持って我々を注視してくださる方々が学内外にすることが刻々とわかる。大変嬉しいことだ。

さらに、根城にしている共用スペースの壁に「学生FDスタッフ」の番付表を掲げた。単なる名前の羅列ではなく、一人ずつ言い得て妙な人物評が添えてある。これが、一種のレファレンスとなり、自分もメンバーに加わりたいと思う学生をひきつけているのかもしれない。

VII 今後の課題

しかし、課題も山積している。

まず、学生側が抱える課題について3つ述べる。

1. FD活動に関する見解の相違、イメージのずれ、温度差

学生FDを立ち上げるのは、案外簡単なことである。声をかければ興味を持ってくれる学生は必ずいる。問題は発足してから、いかにミッションを共有するか、チームとしてのまとまりをつけるかである。これができなければ学生FDのサステナビリティは期待できない。追手門でも、発足当初には、教員を揶揄し、からかうことを信条にする「かみつきFD」が横行した。一方で、居場所を確保したいだけの「居候FD」も目についた。離合集散を繰り返し、最後に残った学生FDのミッションは、教員と職員と学生の橋渡しをする「仲人FD」だった。今は暫定的にはあるが、この「橋渡し」こそが、学生FDの使命なのだ、というアイデンティティでまとまりつつある。

2. アイデアだおれ、計画だおれ、絵に描いた餅

追手門学院大学の学生FDスタッフの会議では、実にたくさんのアイデアが提示される。なかには、甲論乙駁.のうちに、目の覚めるような企画が生まれることがある。また、「追手門でも学生FDサミットを」というような、派手なパフォーマンスが好まれる傾向もある。しかし、いかんせん、なかなか合意形成ができない、アイデアはあっても実現までの道のりの途上で挫折する、完成までの綿密なプランが立てられない。

いまこそ、地道な活動を倦まず弛まず継続するFD活動が、追手門学生FDスタッフには求められる。

3. 「目に見える授業改善」がもたらされないもどかしさ

学生FDスタッフの活躍は目覚ましい。彼らの成長は自他ともに認めるところである。ところが、彼らの活動がはたして大学の授業改善に寄与したか、教学改革に貢献したか、と問われれば、残念ながら「成果はまだまだこれから」と答えざるを得ない。

一方、教職員側にも課題は多い。

1. 大学教育観のずれ

いずこの大学も同じだと思われるが、FDは教員の問題であって、なぜ学生が授業改善に口を出すのか、余計なお世話だ、という撥ねつけである。

2. 「拒みはしない、だが、支援の手も差し伸べない」傍観する教員の群れ

ただ、そんな頑なな教員は少数派である。むしろ学生FD活動に「いいことだ」と一定の賛意を示してくれる大学教員がほとんどである。しかし、彼らの多くは、成り行きを見守っているだけで支援も協力もしない。たとえば、追手門にはFD推進委員会という教員組織があるが、教育研究所に積極的なアクセスは、いまのところ、ない。この傍観する教員の群れが、Best Teacher Awardや教員図鑑や学生発案型授業で、わが身の問題として学生FDスタッフの活動を捉えるようになったとき、どんな反応を示すだろうか。

3. 監督責任と自由放任のバランス

どこまで学生の主体性を尊重するのか、ということである。教職学三位一体という、学生FD活動の大原則を維持するためには、学生の自主性を重んじつつ、教職員との渡りをつけていくのは、この活動を主導する教員であろうと思われる。

VII おわりに

最後に、追手門・学生FDスタッフを主宰してきた経験から、常日頃、胸に刻んでいる筆者自身の心得を、箇条書きに書き留めておきたい。

1. 学生FD活動は、無理強いするものではない。義務でやらされている、これがいちばんいけない。自然発生的に気運が高まるようにしむける。無理強いすると必ず、「なんでこんなしんどいことを、無給で、しかも卒業単位にもならないのに、やっているのか」という疑問とともに、FDの大義名分を捻出しようとする、不毛な議論が始まる。

2. しかし、教員は「支援」にとどまっていはいけない。舵取りはやはり教員の役目。
3. FD 本質論に陥りそうになったら、「走りながら考える」ことを進める。そのためには、行事やイベントを打って、短期目標を設定するのも一つの手。学生 FD サミットのような全国的な行事で、外の空気に触れることが、活動の意義を見直すためには大事だ。
4. 「なぜ学生 FD をやっているか」と聞かれて、「楽しいからやってます」と答えられなければならない。その「楽しさ」とは、ほかならぬ自己の成長の実感であり、おとな（教職員）や同輩（一般学生）からの承認である。
5. 「学生参画が当たり前」という大学の気運を作ることが先決だ。FD だけでなく、広報も、オープンキャンパスも、授業アンケートも、新入生オリエンテーションも、極言すれば、授業も、その一端が学生の手で、学生主体で、行われているのであれば、FD 学生は浮いてしまう。「学生中心の大学」は、たんにお題目ではいけない。大学教育のパラダイム変換の中の一つに、学生 FD が位置付けられなければ意味がないのだ。

IX 質疑応答

- Q：学生FDスタッフの人数構成を見ると、心理学部が多いようだが、学部間の人数の不釣合いは、好ましくない結果を招来しないか。
- A：追手門の学生FDスタッフが、試行錯誤して見出した使命は、“教職学の橋渡し”ということだった。したがって、一学部の意向が、大学全体の教学改革や授業改善に反映する、という事態は想定しがたい。

「学生から見た追手門学院大学の学生FDとは」

追手門学院大学 学生FD 久川尚恵

今回、発表をさせていただくことになり、学生FDのみんなとともに今、感じていることや想いを共有しました。私たちにとって学生FDとはどういうものなのか、どうあるべきなのか。簡単ではありますが、今の追手門学院大学の学生FDを感じてもらえると幸いです。

1. 学生FDの意義

私たちの意義、目標は、教員・職員・学生の橋渡しです。もともと授業に不満を持ったメンバーがたくさん話し合いの中から導き出した考え方です。大学は教員・職員・学生がいて、初めて成り立つものです。教員には教員の、職員には職員の、学生には学生の想いが必ずありますが、お互いにそれを知る術がない。学生がやりたいことを言っても、単なるワガママになってしまっただけなのではないか。どうしてダメなのか、どうすれば実現できるのか。それを大学全体で考えていくために、私たち学生FDができること。それは、それぞれの想いを知る場を作っていくこと。それぞれの想いを繋ぐこと。つまり、橋渡しです。私たちは、大学が大学にいるみんなにとってより良いものになっていくことを目標に、活動しています。

2. なぜ学生FDなのか

大学にはいろいろな組織があります。そんな中でなぜ私たちは学生FDを選んだのか。そしてなぜ続けているのか。その理由は様々です。他学部や教員・職員、大学の壁を越えて交流できる、自分の案が形になる、他大学交流ができる、など。その中でも私が感じるのは成長です。世界や視野が広がった、自分の意見を言えるようになった、というように自分の中で自分の成長を感じられている人が多いようです。

私たちは、梅村先生に土台を作ってもらい始めました。しかし組織としてはほとんどゼロからのスタートでした。時間とやりたいことの量のバランスと全体を見た計画の進め方が上手くできない、メンバー内での意見の食い違い。ぶつかって泣いてもがいて、悔しい思いもたくさんしました。こういった失敗や辛いことが成長に繋がっているのだと、私は学生FDで学びました。自分の中で変化していくということは、その分葛藤が増えて苦しくなります。それでも、私たちは学生FDのメンバーとして活動しています。その理由の一つに、教員や職員との関わりがあります。

私たち学生FDは教育研究所に所属しています。教育研究所には各学部の先生が一人ずついます。梅村先生をはじめ、教育研究所の先生方は学生主体ながらも相談に乗ってくださるなど、良い距離感でいてくれます。その距離感はとても心地よく、私たちは楽しく自由に活動出来ているのだと思います。また、職員の増田さんは学生FDの中でのどんな小さな悩みでも聞いて

くださって、そのたびに的確なアドバイスをしてくれます。事務的なことにおいても、本当にサポートしていただいています。教育研究所の先生方と増田さんがいなければ、今の私たち学生 **FD** はなかったと思います。

そんな、教員や職員との繋がりが強い場所だから、できる範囲が広がり自分の成長もしっかりと感じ取れるのかもしれません。

3. 学生 **FD** の取り組み

追手門学院大学の学生 **FD** には多くの課題があります。その課題を克服するために、大きく分けて 3 つのことに取り組んでいます。

まず、広報です。学生の私たちにとって、学内で認知されていないということは肌で感じる課題の一つです。ガラス張りの部屋で会議を行っていることもあり、興味を持ってもらえているようですが、具体的にどのような活動をしているのかを知ってもらうまでには達していません。そこで、広報・**PR** 活動に力を入れていこうと話しています。ポスターを作成したり、追手門学院大学の **HP** にあるキャンパスレポートというブログで活動報告をしたり、説明会を開いたりしています。この秋学期には広報も実り、8 人の新たなメンバーを迎えることができました。また、広報目的ではありませんがしゃべり場や教員図鑑を通して学生 **FD** を知ってもらいたいと思っています。

次に、記録です。会議に来ることができない人も多いので、情報共有のために議事録を書いていたのですが、読まないのが現状です。今、何がどう動いていてどうなっているのか、全く知らないということもありました。会議の出欠でさえ連絡しない人もいて、意識の低さを感じていました。そこで、**SNS** というものを始めてみました。携帯で見れ、簡単に書き込むことができるので、会議に来ることが難しい人でも把握がしやすいと考えたからです。実際始めてみると、普段なかなか会えない子もコメントをしていたり、発言の少なかった子が発言できていたりします。新たに、みんなの集まる場所ができたような気がしています。

最後に、検証です。学生 **FD** が立ち上がった頃からのメンバーとしては、後輩に伝えていくことが大きな課題としてあります。どう伝えていけばいいのか、伝え方も考えなければならぬと思っています。春休みは時間もありますし、じっくり学生 **FD** を考える時間を持ちたいと、2 月 24、25 日に合宿を行いました。みんなで何か一つのものを作ろう、より良いものを作ろうとしたことで、みんなの意識が少し変わったように感じました。レクリエーションを行ってたくさん笑ったり、学生 **FD** の課題について真剣に話したり、メリハリのある合宿になりました。ただ、初めての試みでスケジュール通りにはいかない部分が多かったので、また次の課題としてしっかり受け止めたいと思います。

4. 最後に

私たち学生 **FD** は、新メンバーを迎え合宿や **SNS** を通して少しずつまとまってきたところです。まだまだ課題はたくさんありますが、自分たちで自分たちなりのやり方を見つけてきています。私個人としては、これから改めて授業や教育にも踏み出していけるのではないかと感じています。メンバー一人一人も学生 **FD** としても成長していくことを目標にこれからも頑張っていきたいと思っています。

アカデミック・コミュニティにおける「リア充」の実現をめざして

法政大学社会学部メディア社会学科 教授 大崎 雄二

【第2ミニシンポジウム】「学生とともに進めるFD」

2011年3月6日(日)

アカデミック・コミュニティにおける「リア充」の実現をめざして

大崎 雄二 (法政大学 社会学部)

日本国の現行法令によれば、学生は大学の構成員ではなく、客体、受益者、通過者とみなされている。学生参画型のFD、大学改善は、学生をこうした単なる「一過性の視聴者」ではなく、「参加者」、さらには「共同制作者」として、教員や職員とともに協働する自律的主体としてとらえ直すことからスタートする。そうした原理、原則等を改めて確認しながら、「リア充」という流行語を鍵に学生参画型FDの必要性、時代の要請、可能性を具体的に考える。

【キーワード】 「リア充(リアル充実)」、キャリアガイダンス(社会的・職業的自立に関する指導等)、「たこつぼ(専門演習)ひきこもり」症候群、“relevance”(関係性、関連性)、制度的「主催者側」の協働体制構築

1. 日本国における大学とは

(1) 法的根拠、定義

- 1) 機能、役割、目的、目標 (2006年改定「教育基本法」第7条、学校教育法 第83条)
 - ① 教育、② 研究、③ 社会貢献
- 2) 自主性、自律性および教育、研究の特性の尊重 (2006年改定「教育基本法」第7条2)
- 3) 構成要素、構成員 (学校教育法 第92条)
 - ① 教員(学長、[副学長、学部長]、教授、[准教授、講師、助教、助手])
 - ② 事務職員、(技術職員、その他必要な職員)

* 大学とは、教育、研究、社会貢献を目的とする学校であり、教員と職員により構成される
 → 大学を構成する要素(＝運営主体)に学生は含まれていない
 = 学生は「大学の教育等の受益者、受け手」として想定されている“invisible”な客体

(2) 大学における教学改革、FD

「大学設置基準(1956年 文部省令)」改定(2008年度～ いわゆる「FDの義務化」)

大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。(第25条3 下線は引用者による。以下同)

2. 学生の役割拡大、学生参加の根拠

(1) 教育の目的、目標

1) 教育基本法（1947 年）

- ① 勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成（第1条）
- ② 実際生活に即し、自発的精神を養い、自他の敬愛と協力によって、文化の創造と発展に貢献する（第2条）

2) 2006 年改定「教育基本法」

- ① 自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと（第2条二）
- ② 公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと（第2条三）

(2) 「大学を設置するのに必要な最低の基準」としての大学設置基準

この省令で定める設置基準は、大学を設置するのに必要な最低の基準とする。（第1条2）

(3) 文部科学省、中央教育審議会(大学分科会)

- 1) 個別の大学の学生参画については GP 等で採用し、奨励する態度も
- 2) 「大学における学生生活の充実方策について(報告)－学生の立場に立った大学づくりを目指して－」¹(2000年6月14日 文部省高等教育局 大学における学生生活の充実に関する調査研究会〔座長 廣中平祐 山口大学長[当時]〕)

＊ 積極的な学生参画型の具体的な提唱、推進は、その後の答申や報告には見られない

(4) 「21 世紀型市民」の訓練の場としての大学、練習問題としての学生参画という考え方

- 1) 教育基本法的「教育」の定義の原点に立ち戻って考える
- 2) 「キャリアガイダンス(社会的・職業的自立に関する指導等)」の制度化²(大学設置基準

¹ 学生の希望や意見を適切に大学運営に反映させることが重要とし、学生が大学運営に関わることを通じて社会的成長を促すことを期待して、① 学生のアンケート調査・実態調査、② 学生代表と大学運営責任者の懇談会等の実施、③ 学生代表の大学諸機関への参加などを提言。その対象分野を正課外教育、福利厚生のみならず、正課教育の内容のあり方や授業方法、教育条件の改善などへ拡大させ、授業評価の実施方法を工夫・改善し、結果を公表することによる適切な実施をおこなう、学生代表との意見交換の場の活用をする等の提言をおこなっている。しかし一方では、欧米諸国のような大学の管理運営組織への学生代表の参加は、これまでの経緯や現状に鑑み慎重な検討が必要とし、大学の責任者が定期的に学生と意見交換の場を設け、その結果を大学運営に反映すると述べるに留めている。(II 各大学における改善方策－学生に対する指導体制の充実を目指して 3 学生の希望・意見の反映)

² (社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制) 第四十二条の二 大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職

改定〔2011 年度～〕)

3. 現状と課題

(1) 2010 年度 法政大学社会学部の教学改革(「FD」)の現状
表1.

	項 目	内 容	学 生	嘱託 職員	専任 職員	兼任 講師	専任 教員
0	カリキュラム改革	「7 コース・8 プログラム」方式 (2006 年度～)	☆	-	△	☆	◎
①	FD 委員会	(2003 年度後期～)	☆	-	△	-	◎
②	FD 懇談会	従来の散発的なものを制度化 (2009 年度～試行)	☆	☆	☆	○	○
3	担当教員打合わせ会	外国語(英語、英語以外)、情報教育、基礎演習等	-	-	△	△	○
④	実験授業	企画提案方式で実施 (2005 年度～)	○	-	☆	☆	◎
5	基礎演習	1 年生向けに 20 人規模で設置 (1984 年度～)	○	-	△	○	○
⑥	学生アシスタント	授業アシスタント、学習サポーター (2005 年度～)	◎	△	△	○	○
7	シャガク・カフェ	主として昼休みの時間帯に実施 (2009 年度～)	○	-	△	☆	◎
⑧	学部研究発表会	各ゼミ、授業の研究発表会 (年 1 回、2005 年度～)	◎	-	△	☆	◎
⑨	交流会	演習説明会の後の情報交流会 (年 1 回、2005 年度～)	◎	-	△	☆	◎
⑩	専門演習紹介冊子	主として専門ゼミを選択する 1 年生向けに発行(年 1 回)	◎	-	△	☆	◎
⑪	専門演習説明会	主として専門ゼミを選択する 1 年生向けに実施(年 1 回)	◎	-	△	☆	◎
12	オープン・ゼミ	主として 1 年生向けに実施 (2009 年度～)	○	-	△	☆	◎
13	公開ゼミ・授業等	外部ゲストや映画上映、公開討論会等	◎	-	△	☆	◎
14	説明会、相談会	主としてコース・プログラムを選択する 1 年生向け	☆	-	△	-	◎
15	学部 HP の運用	ゼミ(情報科目担当教員)に運営を委託(2003 年度～)	◎	-	-	-	○
16	学部広報冊子制作	主として受験生に配布する『社会学部への招待』	◎	-	◎	-	◎
17	学部広報 DVD 制作	主として受験生に配布する学部紹介 DVD(2001 年度～)	◎	-	◎	-	◎
18	シャガク・コロキウム	教員、院生等の最新の研究発表会(2008 年度～)	○	-	-	☆	◎
19	優秀卒業論文集	年度ごとに数本を選び、全文を掲載(2005 年度～)	○	-	△	-	◎
20	卒業式祝賀会の運営	2009 年度、卒業生から運営委員を募り試行	◎	-	△	-	○
	授業改善アンケート	全学 FD 推進センターが実施 (2005 年度～)	○	△	△	○	○

①、②等の○囲いの数字は、主として学部 FD 委員会が関与するもの

◎ 積極的に参加、○ 参加、△ 業務として、- 不参加、☆ 今後に期待

1) 広報 学部 HP の運用(表1の番号=15)、(受験生向け)広報(冊子、DVD)(16、17)

2) 専門ゼミ等を基盤とした学習、研究発表、相互交流

学部研究発表会(⑧)、交流会(⑨)、専門演習紹介冊子(⑩)、専門演習説明会(⑪)

3) 授業アシスタント 大規模授業アシスタント、学習サポーター(⑥)

業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする。

(2) 「専門演習(ゼミ)選び」のプロセスの包括的見直し

1) 学生主体の催しと教職員主体の学部行事とのコラボレーション(2009 年度～の改善)

表2.

行事	日時		学生	職員	教員
1 年生へのオリエンテーション	11/30	1-2 限	△	○	◎ 説明
専門演習紹介冊子配布		2 限後	◎ 作成	△	△
社会学部研究発表会		3-4 限	◎ 運営	○ 協力	◎ 協力
オープン・ゼミ	11-12 月		○	-	◎
コース・プログラム相談会	12/13、14		-	-	◎
専門演習説明会	12/7	3-4 限	◎ 運営	△	△(教授会)
交流会		4 限後	◎ 運営	○ 協力	○ 協力

太枠囲みが学生主体の「社学 Fes'10」、斜体は教員主体の「オリエンテーション・ウィークス」の諸行事

2) 催し物の順番の変更と情報提供の工夫(先に研究、学習内容を知り、後で詳しく聞く)

表3.

⑧	学部研究発表会	日程を前半に変更、発表と交代、移動の時間的余裕を考慮
⑨	交流会	日程を後半最後に変更
⑩	専門演習紹介冊子	学生に任せていた2 ページを学生、教員1 ページずつに変更
⑪	専門演習説明会	日程を前半から後半へ変更

(3) 再検討、解決が必要な諸問題

表4.

		項 目	内 容
×	15	学部 HP の運用	2003 年度開始時から担当していた専門演習が運営を返上
要 見 直 し	0	カリキュラム改革	専任教員の退職等による科目の非専任化、形骸化、空洞化
	②	FD 懇談会	2010 年度、開催できず(別途、学生からの聞き取りは実施)
	3	担当教員打合わせ会	「基礎演習」担当教員間の温度差、不満噴出、出席率低下等
	5	基礎演習	授業内容のばらつき、初年次教育の概念がうまく共有できない
	7	シャガク・カフェ ³	初年度の 2009 年度ほど活発に開催されず
	20	卒業式祝賀会の運営	2009 年度試行の際、出し物の一部に品位を欠くものがあった

* 教学改革は一步ずつ、不断の努力、改善が肝要。「ガラパゴス化」は他人事にあらず。
まさにメビウスの輪／あざなえる縄の如き現実を直視し、解決法を見出すべし。

³ 学生生活委員会が中心となって募集、運営。キャンパスや学部の課題、時事問題や学術的なワンテーマの討論会形式の「シャガク・カフェ」、映像やダンスなどパフォーマンスの発表の場としての「シャガク・アールスペース」を実施。今後は、企画や運営などを学生主体の形にしていづく試行中。

- 1) 大規模学部特有の問題＝「たこつぼ(専門演習)ひきこもり」症候群(学生、教員)
 - ① 「ゼミをコアにしたアカデミック・コミュニティ」の陥穽

少人数教育のゼミが、アカデミック・コミュニティのコアに
 ⇒ 「学問的成長の共有」「豊かな人格的交流の存在」「ひとりひとりが能動的に関与し
 担い手となる」という3つの条件の形成
 ⇔ 学部全体に対する視座の欠如
 ← 多様性 (Faculty of Social Sciences＝「社会科学」学部である法政大学社会学部)
 - ② 放任、無責任の横行

e.g. 「基礎演習」の個別の授業内容(初年次教育としての妥当性、最低限の共通性)
 専門演習運営の過度の学生依存(説明会、説明冊子、面接等)
- 2) FD「先進的」取り組み学部の「後進性」、放任、放置
 - ① 1年次の「基礎演習」導入等さまざまな教学改革(1984年の多摩キャンパス移転以来)
 - ② 専門演習説明会、紹介冊子発行(1990年代～専門演習ごとの学生主体で運営)
 - ③ 全国初、学生運営の学部公式ウェブサイト(2003年～「SOC」)の行き詰まり(2010年)
 - ④ フィールドの教育力(演習や実習でのフィールド学習＝社会の現場を体験)重視
 ⇒ 「問題意識を触発する」「コミュニケーション能力を豊かにする」「チームワークを鍛える」
 「学問的探求心を高める」⇔ 国際的フィールドワークに対する各種措置の欠如
- 3) 2010年度の課題(学生と職員の参加の促進＋学生、職員、教員の協力、協働)と反省
 - ① 学生＝「未来からの留学生」に信頼と参加の保証、民主的な社会での行動の訓練を
 - ・ 学ぶこと、働くこと、生きることの“relevance”(関係性、関連性)重視 → 尊厳の回復
 - ・ ひとりひとりの人間の大きな可能性への信頼 (公共性、社会性の中で育まれるもの)
 - ・ 誰も疎外しない、排除しない、ひとりひとりを大切にする連帯と協働の輪
 - ・ 若い仲間、同じ人間の後輩としての連帯感・敬意 × 敵意、「今どきの若い者は……」
 - ・ 「いいところ」を伸ばす、ほめる × 悪口、けなす、否定形(“not”)……
 - ② 「臨床的」FD＝現場の教員ならではの実体験／実感に基づいた個別多様なFD
 - ・ 教室の学生をまっすぐに見据え、しっかり向かい合って学生の声聞き、議論する
 - ・ 現場で日々学生と接する強み → 個別、具体的、現実的に
 ← 「データばかり見て、人を診ない」現代医療を反面教師に
 - ・ 「普段着」のFD＝肩肘張らない、身の丈に合った、疲れない、「持続発展可能」なFD
 ⇔ 「授業参観日」的／名人芸の／準備や時間が必要な／よそゆきの／疲れるFD
 - ③ 「スロー・フード型FD」＝結果重視型から過程重視型へ
 - ・ 効果や結果をすぐには求めないプロセス重視の学びの場・時間の構築
 ＝考える、議論する、よりよく生きるための方策を模索するためのFD
 - ④ 「上からのFD」と「下から(草の根から／現場からの)FD」のよき拮抗、相克の重要性
 最小限の干渉、関与 ＋ 最大限の自発的努力 → 調和、協力 → 教学改革の発展
 - ⑤ 「すでに行っているFDの『発見』こそ大切⁴⁾」(寺崎昌男) ＋ 再検証も大切

⁴⁾ 「FD・SD を『わがこと』とするために ― 大学政策の変転とサバイバルのもとで考える ―」(2009年10月10日、2009年度法政大学 第7回FDシンポジウム 基調講演報告書、11ページ)

<http://www.hosei.ac.jp/fd/eventws/index.html>

4. 法政大学社会学部的「リア充」の実現のために

— 入学(初年時教育)から卒業(キャリアガイダンス)まで

(1) 不可欠な制度的「主催者側」の協働

＝職員、兼任講師と専任教員との間の円滑で活発な協働の土壌構築

1) 実務的協働体制の構築

積極的な役割分担、協働、協力体制の構築

⇔ 押し付け合い、「共同責任」という究極の無責任体制……

2) 心理的協働体制の構築

職員、教員の特性、特徴、「プロフェッショナル」としての相互承認、相互認識の深化

← 雑木林、コンパニオンプラントに学ぶ共存共栄、

“井水不犯河水(互いに相手の領分を侵さない)”という知恵

3) 制度的「主催者側」(＝法令上、業務上)の協働の基盤構築が大前提 → 学生の参画

→ アカデミック・コミュニティの輪と和の広がり → 「草の根からの教学改革」の深化

(2) 学生参画の試行錯誤

1) 「非効率」(時間と手間と費用)との根気強い闘い

2) 「裏切られること」「肩すかしを食うこと」「期待外れに終わること」等に対する十分な覚悟

3) 1)、2)にもかかわらず得られる大きな成果とかけがえのないよろこびの共有

(3) いったい何をどこまで制度化し、どこから先を学生に任せるか

— 「専門演習請負制」の限界と学生組織(『官製』自治会?!)の模索

⇒ 「学生 FD スタッフ」(仮称＝「顔が見える物言う学生」)制度の導入

「学生力」をさらに引き出す試み → 自律的・批判的な学びの主体としての学生の育成

1) 学部研究発表会運営委員会、各種アシスタントの学生たちを集める横断的、包括的試み

2) 主担当の任務を決める(ランチタイム・セミナー、授業モニター、発表会……)

表5. 今後の重点目標

「生徒」から「学生」へ	初年時教育の整備＝「基礎演習」改革、真の学びのために
「21 世紀型市民」をめざして	学生参画の拡大(授業改善、イベント運営、制度化)
— 「シャカイ」で生きる 練習問題	社会学部／実社会で生きる力の涵養(社会学部独自の「キャリアガイ ダンス」科目の設置・運営、多摩ボランティア・センターとの協働等)

以上

大阪大学における「パンキョー革命」(学生・教職員懇談会)の成果・課題・展望

大阪大学大学教育実践センター 准教授

服部 憲児

大阪大学における「パンキョー革命」 (学生・教職員懇談会)の成果・課題・展望

大阪大学大学教育実践センター 准教授

服部 憲児

大阪大学文学部 2 回生

岡部 誠

大阪大学法学部 2 回生

菱田 伊駒

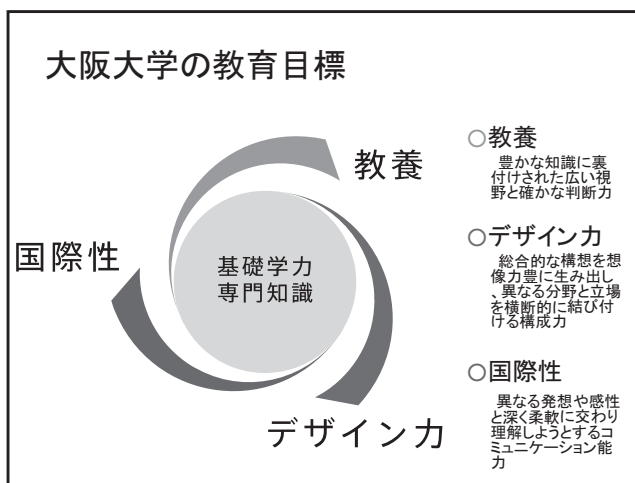
1. 大阪大学における「パンキョー革命」(学生・教職員懇談会)

はじめに

本稿では、大阪大学における学生参加型 FD に相当する「パンキョー革命」(正式名称は「学生・教職員懇談会」)の取組について、成立の経緯、活動、成果、課題、展望を紹介する。また、実際に活動に参加している学生の意見・感想等や、当日の質疑応答に関することをも後掲している。なお、「パンキョー」という言葉は「一般教養」(ないしは「一般教育」)を意味する学生の俗語である。本活動に関わっている学生たちは教養教育の重要性を強く認識しており、また言葉の歴史を知った上で愛情を持って「パンキョー」の言葉を用いていることを強調しておきたい。

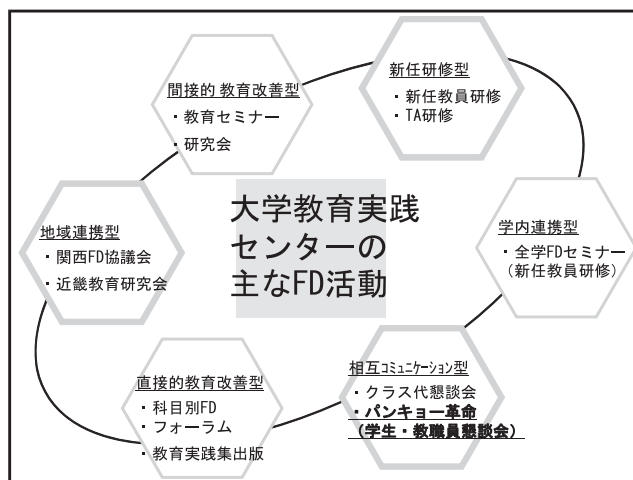
(1)FD としての位置づけ

「パンキョー革命」は、教職員側としては、大阪大学大学教育実践センター(以下「実践センター」)の FD 推進部門を中心に運営されてきた。実践センターは、「全学共通教育」の企画運営上の責任体制の明確化と機動力の強化のために、平成 16 年に設立された全学組織であり、大阪大学の教育目標である「教養」「デザイン力」「国際性」を身に付けた学生の育成を担っている。FD に関しては、大阪大学に全学の FD 委員会ができたのは平成 22 年であり、それまでは実践センターの FD 推進部門(20 年度までは教員研修支援部門)が全学 FD セミナーなどの調整を行ってきた。そのような経緯もあり、実践センター



では様々な FD 活動が行われている。その中で「パンキョー革命」は「相互コミュニケーション型 FD」として位置づけられている。

「パンキョー革命」は、大阪大学の共通教育のより良い在り方を、学生と教職員が対話をしながら共に考えていくために、様々なイベントの企画・実施や改善案の提案・実行を行っている。メインの活動は年に1～2回開催されるイベント「学生・教職員懇談会」で、これまでに4回の実施した。このイベントにより、学生・教員・職員それぞれが互いの意見を聞き、自らの教育・学習活動等を振り返り、改善に繋がることを期待している。また、学生・教員・職員で構成される準備委員会（パンキョー革命推進チーム：以下「推進チーム」）を組織し、企画運営段階からの対話型・学生参加型・三位一体型のFD・SDを目指している。



なお、「パンキョー革命」は機能として FD・SD の要素を備えているが、関わっている学生たちにはそのことを意識させていない——もちろん隠してもいい。学生にとって重要なのは教職員の力量向上ではなく、授業・教育の改善であるからである。ただ、関心を持った学生は自ら FD・SD について勉強しているようである。

(2) 「パンキョー革命」の活動

第1回のイベント（当時は「学生・教職員懇談会」）が行われたのは平成20年7月である。この年は、大阪大学と大阪外国語大学の統合後、初めて共通教育の授業が行われた年であった。そのため、統合がもたらした共通教育へのメリットや課題はどのようなものであったかを検討する必要がある。共通教育担当教員から「学生については統合により相乗効果が見られる一方で、教員についてはまだ十分に統合の効果が認識されていない」という指摘があったのを受けて、学生と教員が本音で語り合う場を設け、相互に各人の意識を高め、よりよい共通教育を構築することを目指して、第1回のイベントが企画・実施されたのが発足のきっかけである。



第1回が好評であったので、急きょ第2回を開催することになり、同年12月に実施した。その後、実施体制を整備し、21年度・22年度にも1回ずつイベントを実施し、これ

まで計4回行われている。最初の2回のイベントは、評判の良い授業をしている先生の実践報告と受講生の意見・感想を聞いた後、より良い授業・教育に関するグループワークを行う形で行った。第1回には副学長等の参加もあり、第2回には鷺田清一総長からビデオ・メッセージをいただいた。第3回目以降はグループワークに特化し、推進チームが事前に用意したテーマについて話し合う形式を取っている。回によってバラツキはあるが、各回40～90名の参加者があり、毎回熱い議論が展開されている。

第1回イベントは教員主導で企画・運営が進められたが、特に広報の面で上手くいかなかったのが、学生の助けを借りることになった。第2回イベントでも同様に学生の助けを借りながら実施したが、終了後の反省会で「せっかくだから、企画段階から学生・教員・職員で一緒にやってはどうだろうか？」という話になり、懇談会準備会を設立し、企画運営段階から対話型・学生参画型の活動を展開することになった。第1回イベントから職員の参加もあったことから、この準備会で会の名称を「学生・教職員懇談会」に改め、さらに愛称を「パンキョー革命」とすることにした。そして、準備会も後に「パンキョー革命推進チーム」の名称とすることになった。主に各種イベントの企画・実施や教育改善に向けての活動を行っており、概ね週1回ミーティングを開いている。



「パンキョー革命」はメンバー内外を必ずしも明確に区切っておらず、各人が無理のない範囲で活動することを基本としており、何かする時に声を掛け合い、興味のある人、時間を工面できる人が参加する形を取っている。とはいえ、中心的に活動するメンバーはある程度決まっている。推進チームでは、運営者用と広報用の2種類のメーリスを作っている。前者には20名弱（学生10名程度）が登録されており、「パンキョー革命」イベントの企画・実施や関連プロジェクトの中核メンバーになっている（ただし、全ての活動に全員が同じ比重で関わっているわけではない）。後者には過去に参加していたメンバー、イベントの常連、小プロジェクト単位での参加者などが登録している。

平成22年度は、より多くの学生・教職員を巻き込んでいくことを重点課題にし、多彩なイベントを企画・実施した。すなわち、「共通教育の改善」と「学生・教職員間の交流促進」という2つの目的のうち、後者に重点が置かれた。具体的には、

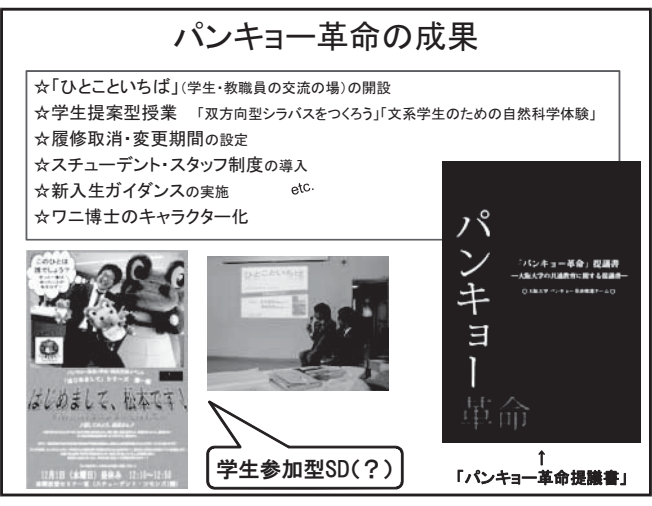


「第4回学生・教職員懇談会（第4次パンキョー革命）」を従来通り実施するとともに、新入生ガイダンス、キャリアケーススタディ、しゃべってみない会（プレゼン練習会）、ワニゼミ（ワニ着ぐるみプロジェクト）、学生・職員交流イベント、阪大1000人インタビューといった小プロジェクトを実施した。また、学外交流にも積極的に取り組んでいる。



(3)「パンキョー革命」の成果

これまでの「パンキョー革命」の活動を通して、いくつかの成果が得られた。第1に、共通教育の改善が一定程度なされたことである。たとえば、①学生・教職員の交流の場の開設、②学生提案型授業の開講、③履修登録の取消・変更期間の設定、④スチューデント・スタッフ制度の導入、⑤新入生ガイダンスの実施、⑥ワニ博士のキャラクター化などが挙げられる。第2に、過去のイベントでの議論



を踏まえて「パンキョー革命提議書」（以下「提議書」）を作成したことである。この提議書は、推進チームの学生メンバーが中心になり、第1～3回のイベントでの議論を総括して、阪大の共通教育の問題構造を分析し、共通教育の改革提言をまとめたものである（全35頁）。平成22年2月10日に実践センター長宛に提出された。この提議書で提案された事柄の多くが実現あるいは実施中・検討中となっており、未着手の改革提言の実現に向けて推進チームで取り組んでいる。第3に、職員の参加が増えてきており、SD機能が強化され、意識向上に貢献していることが挙げられる。学生と職員の交流イベントが実現したり、トークイベントに職員がゲストとして招かれるなどしている。最後に、第4の成果として、やっていて楽しいことを挙げておきたい（ただし、たいへんなことも多いのであるが…）。

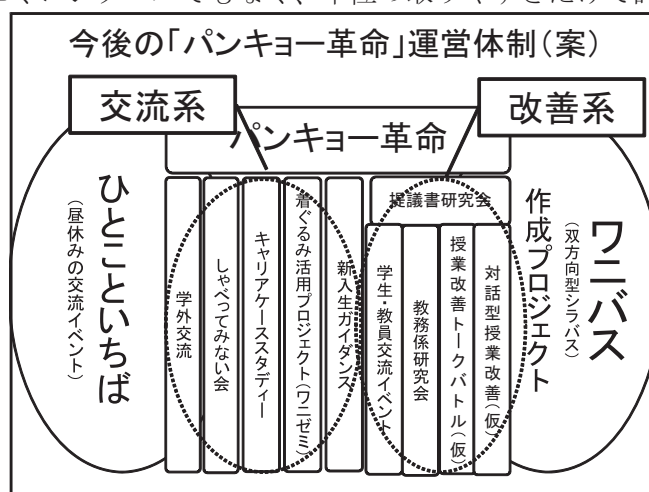
(4)「パンキョー革命」の課題

もちろん、「パンキョー革命」にはいくつかの課題がある。第1に、参加学生層の拡大である。実際には多くの学生が無関心か、授業などに不満はあっても自分で何かするまでの気は無いのである。より多くの学生に関心を持ってもらうように、いかに働きかけをす

るかが問題である。今年度の4月には、共通教育棟の各所に「提議書」を置き、自由に見てもらうようにした。これを見て共感し、推進チームに加わった者もあり、このような学生を多く増やしたいと思っている。第2に、頑張って改善しても、新入生には改善後が当たり前で、要求には切りがないという点である。これまでの改善の軌跡を理解してもらえるように工夫が必要となる。第3に、活動の認知度が上がり、大学の支援を一定受けられるようにはなったが、必ずしも全員から好意的に思われているわけではないことである。第4に、担当している教員の立場からすると、楽しさとは裏腹に、やはり学生相手は何かとたいへんな事が多く、また、研究時間の確保も悩みの種となっている。

(5)「パンキョー革命」の展望

今後の「パンキョー革命」では、他の学生参加型の活動との連携および授業・教育改善の面での成果を考えていきたい。他の学生参加型活動としては、学生・教職員の交流の場である「ひとこといちば」と、「双方向型シラバス（ワニバス）」の作成プロジェクトとがある。前者は、毎週1回昼休みに、開放型セミナー室を利用して、教員のミニトークや学生団体の紹介などを行うもので、企画・実施は学生中心で行っている。後者は、教員が作成する（学生にとっては）分かりにくいシラバスでもなく、単位の取りやすさだけで評価するいわゆる鬼仏表でもない、学生の視点を取り入れた、授業の良さを伝える新しいタイプのシラバスである。学生提案による基礎セミナー「双方向型シラバスを作ろう」で作成したものをベースに、学生有志が作成している。この両者には、推進チームのメンバーも関わっており、また、実践センターに新設された「学生参加型FD推進委員会」の守備範囲でもあるので、今後、連携を図っていきたい。



授業・教育改善については、本来ここが最も重要であるにも関わらず、立ち後れ感が否めない。現在のパンキョー革命の活動は、交流型（より多くの学生・教職員を巻き込んでいくための活動）と改善型（直接的に授業・教育の改善を図る活動）とに分かれる。前者は様々なプロジェクトを同時並行的に走らせているが、プロジェクト単位で企画・運営に関わる学生・教職員を増やしていきたいと考えている。後者は、前者と比べると立ち後れているので、強化が急務であり、具体的な活動を企画・準備中である。



(服部憲児)

参考文献・資料等

- 1) 大阪大学大学教育実践センター・ホームページ (<http://www.cep.osaka-u.ac.jp/>)
- 2) 大阪大学大学教育実践センター『魅力ある授業のために』(大阪大学出版会、平成 19 年)。
- 3) 大阪大学大学教育実践センター『魅力ある授業のために 2』(大阪大学出版会、平成 22 年)。
- 4) 大阪大学大学教育実践センター『パンキョー革命(学生・教職員懇談会)報告書』(平成 22 年)。
- 5) 大阪大学大学教育実践センター学生参加型 FD 推進委員会『「パンキョー革命」「ひとこといちば」「ワニバス」報告書 2010』(平成 23 年)。
- 6) 大阪大学パンキョー革命推進チーム『「パンキョー革命」提議書—大阪大学の共通教育に関する提議書—』(平成 22 年)。
- 7) 大阪大学大学教育実践センター評価委員会『大阪大学大学教育実践センター 自己評価報告書』(平成 21 年)。
- 8) 服部憲児・山成数明「共通教育を熱く語る! — 第 1 回学生・教職員懇談会の実施と分析 —」『大阪大学 大学教育実践センター紀要』第 5 号(平成 21 年)。
- 9) 早田幸政・諸星裕・青野透編『高等教育論読本』(ミネルヴァ書房、平成 22 年)。

2. 仲間を増やして、全学規模でのFDを!

まず私が「パンキョー革命」に携わるようになったきっかけについて簡単に紹介させていただく。もともと私は FD 活動について関心があったわけではなく、大学教育に対する問題意識も特になかった。強いて言うならば、教員志望であり教育そのものについては興味があったぐらいである。私が教育に関心があるということが人づてに「パンキョー革命」のメンバーの耳に入ったようで、服部先生や先輩方から声をかけてもらった。その時点では FD のことは全く知らなかったが、教育について新しい視点を得る機会になるのではないかと思い、参加させていただくことになった。

学生 FD 活動を通して知ったことは、FD 活動というものが全国的に行われるようになっているということである。学生 FD サミット等のイベントに参加し、他大学の学生や教職員と交流する機会がこれまでにあったが、全国にはこれほど熱心に FD に取り組んでいる大学があるのかと知って驚き、それは自分たちにとって刺激になった。

しかし同時に、現実的で厳しいことを言うようだが、FD 活動の成果は全学的にあらわれているのか、といった疑問も抱いた。つまり、他の多くの学生や教職員を巻き込めているのか、ということである。学生 FD 活動の多くは「三位一体」「学生主体」で行われているという。だが、ちょっと立ち止まって考えてみたい。たとえば、「学生」と一口に言っても、少なくとも 3 つのタイプに分かれるはずである。A.やる気があって、実際に行動する学生、B.やる気はあるが、行動しない(できない)学生、C.やる気もなく、行動もしない学生、の 3 タイプである。学生 FD に携わっている学生というのは、すべての学生から見ると、ほんの一握りの存在である。残り多くの学生というのは、B タイプ・C タイプ

である。もし全学的に FD 活動の成果を上げようと思うのであれば、理解者を増やしていく必要があるだろう。どれほどいいアイデアがあっても、理解者が得られないと実現は難しい。「絵に描いた餅」ではあまりにもむなし。今後は FD 活動を理解してくれる仲間を増やしていくことが求められるのではないだろうか。その意味で、「パンキョー革命」が行っている「交流系 FD」は、仲間を増やすという点で一定の成果を上げているように思われる。しかし、交流系 FD ばかりに力を注いでいては、肝心の「改善系 FD」はおろそかになる。これは、私たちの今年度の活動の反省点の一つでもある。「交流系 FD」と「改善系 FD」の両立、あるいは、何か新しいスタイルを生み出すことが必要になるだろう（今現在、「対話型 FD」の構想がある）。

最後に一言。「パンキョー革命」の活動を通して大学教育が抱える問題点を知ることができ、自分自身が「学生」（受け身の「生徒」とは異なる）であるという自覚するようになった。将来私が中学高校の教壇に立つ時、生徒たちに大学進学の意味について胸を張って伝えられるようになりたい。



(岡部誠)

3. 「ワニバス」プロジェクトに取り組んで思うこと

ここでは、実際の具体的なプロジェクトについて、学生として関わった上での感想を述べる。ここでは「パンキョー革命」に関連する活動であり、筆者が中心に関わった「ワニバス（双方向型シラバス）」を取り上げる。

ワニバスについてはすでに触れられているが、補足する。「ワニバス」という名前の由来は、阪大のマスコットキャラが「ワニ」なので、「シラバス」をもじって「ワニバス」と名付けたのである。教員の選択、連絡、インタビュー、まとめ、といった作業は全て学生の手で行われる。インタビューが中心的な作業になるが、質問の内容も学生で考える。質問の例としては、授業の形式にまつわるものから、「先生がこの授業で伝えたいことは？」、「先生が考える教育とは？」などという、単なる授業の形式にとどまらない質問もある。教員からのサポートとしては、入稿や、進行状況の確認などが、行われる。

(1) 活動から得られた成果

ワニバスを通しての成果であるが、3点考えられる。1つはインタビューをする学生自身の向上である。1対1、ないし1対2の1時間ほどのインタビューを通して、授業中には知ることのできなかった教員の考えに触れることができる。

また、形式通りの質問をしていては、通り一辺の表面上のインタビューで終わってしまうこともある。つまり、単に受動的に授業を受けている時とは違い、自ら主体的に、会話の流れに合わせて質問を考えていかなければいけない。こういった機会を教員と持つこと

が少ない学生にとっては、非常に貴重なものになる。インタビューを終えた学生の感想としても「今まで何を考えているかわからなかった先生の話が聞けて良かった」、「今まで考えたことのないようなことを考えるきっかけになった」、などと非常に前向きなものが多かった。

2点目は、他の学生にとっての成果である。インタビューの結果も含めた授業のまとめは、在学生へ向けて配布される予定である。これは、まだ現時点では、配布が始まっていないので、確定はできないが、これまでの「わかりにくい」と評判だったシラバスに比べ、見易さははるかに改善しているのは確実なので、この「ワニバス」を読むことによって、授業に対する考え方が変わる可能性もある。また、「面白そう」と思った教員の部屋に足を運んでみる学生が出てきても面白い。

3点目は、教員にとっての成果である。授業以外で学生との接触がない教員がほとんどなので、そういった教員にとっては、学生と、授業、ひいては教育について話す機会というのは珍しいものである。インタビューを終えて、「学生の考えを聞く機会を持てて良かった」という感想を伝えてくださる教員もいた。

(2) 活動の際の留意点

まず、ワニバスプロジェクトに関する問題点だが、いくつかあるが、ここではスペース上の問題から割愛する。継続して活動してみなければわからないところが多いので、各大学で試行錯誤の上で取り組んでもらいたい。

ただ、活動をしていて感じたこととしては、確かになんとなく、「インタビューをしにいこう」という気持ちで行っても得られるものは多いが、もっと学生自身が意識的にインタビューを含めた活動を行えば、より得られる成果は大きくなると思われる。たとえば、「なぜ、インタビューを行うのか」、「自分たちは先生にどんなことを聞きたいのか」などである。事前にこういったことに自覚的であればあるほど、質問の内容も変わってくるし、最終的にできあがる授業紹介の形も変わってくるであろう。

そして、こういった「本質的」な問題意識を持つ上で、教員が果たす役割は大きい。「こういう風に聞きに行きなさい」というのではなく、学生が、自らそういった問題意識を持てるような「問い」を発すること。それをぜひ、指導に当たる教員の方には意識していただきたいと思う。



(菱田伊駒)

4. 当日の質疑応答

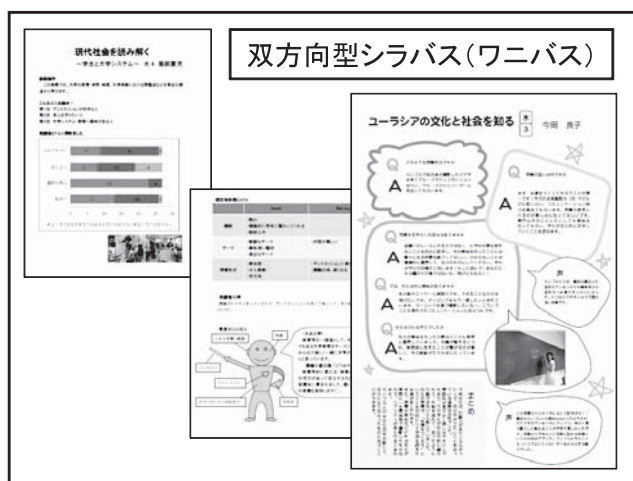
報告の後の質疑応答時間においては、双方向型シラバス（ワニバス）および「パンキョー革命提議書」に関して質問が出た。

(1) 双方向型シラバスについて

双方向型シラバスについての質問は、教員の授業を評価するのは誰かということと、学生が作成すると教員作成のシラバスと乖離したり、いわゆる鬼仏表（単位の取り易さによる授業評価）のようにならないか、という内容のものであった。双方向型シラバス自体は「パンキョー革命」とは独立した活動である。ただし、「パンキョー革命」イベントでの学生提案をきっかけとしていること、作成に携わっている学生・教員が幾らか重なっていること、授業改善を目指すという目標が共通していることなどから、密接に関連する活動だと言える。

双方向型シラバスは、前期に基礎セミナー（1回生向けの少人数ゼミ）で開発し、後期に学生有志により一定数を作成する形になっている。したがって、誰が作成するかについては、前期受講者を中心とした学生有志（推進チーム・メンバーも一部含まれる）である。

前期に授業で開発するので、一定の質は保たれるようになっている。授業において、教員作成のシラバス、学生が作成する鬼仏表、それぞれの長所を取り入れ、短所を克服することを目指して開発している。また、「良い授業とは何か?」、「協力してくれる教員に対して失礼な内容になっていないか?」などを適宜考えさせながら作成している。作成対象となる授業も、学生が取り上げようと思うぐらいであるから、少なくとも一定の魅力があり、担当教員も熱心であることが多い。そのため、これまで特に大きなトラブルが発生したことはない。



(2) 「パンキョー革命提議書」について

提議書については、その内容と実績について質問があった。提議書は推進チーム・メンバーが、共通教育の意義や阪大の教育目標との関係を踏まえながら、「共有」「授業」「交流」の3領域に分けて共通教育の問題構造を分析し、その解決策を提言したものである。目次は以下の通りである。実践センターのホームページから「提議書」をダウンロードできるので、詳細については原典を御参照いただきたい。

1. はじめに

- 1.1 共通教育について
- 1.2 パンキョー革命について
- 1.3 パンキョー革命提議書について

2. 本提議書の立場

- 2.1 本提議書の目的

3. 共通教育に関する提案

- 3.1 共通教育(パンキョー)の意義とは
- 3.2 「共有」グループ 提議書
- 3.3 「授業」グループ 提議書
 - A 動機 B 履修登録 C 授業形態
 - D 学生と教員の態度 E 成績評価

2.2 共通教育が抱える問題の構造

2.3 本提議書の構成

3.4 「交流」グループ 提議書

4. おわりに

「学生の力だけでは、大学を変えることはできない。教員の力だけでは、大学を変えることはできない。職員の力だけでは、大学を変えることはできない。この3者がパートナーとして、それぞれの持ち味を生かせるように力をあわせることではじめて、夢が現実となる。5年後、10年後、100年後、大阪大学の共通教育に携わっている人が、このパンキョー革命は本当に「革命」であったとすることができるだろうか。パンキョー革命が大阪大学の共通教育の歴史にその名を刻むことができるかどうかは、今後の取り組みに大きく左右されるであろう。「革命」はまだ始まったばかりである。」（「パンキョー革命提議書」35頁より）

現在のパンキョー革命の活動の1つが、提議書の実現である。上にも示したように、いくつかは既に実現されており（交流イベントの実施、ワニ博士のキャラクター化、基礎セミナーの充実など）、また実施に向けて検討中のものも多い。しかしながら、成績に関することやクラス指定に関することなどは遅れがちである。全体的な傾向としては、交流系の提言については実現度が相対的に高くなっているが、改善系、より直接的に授業や教員に関わることについては、まだまだこれからである。平成23年度は、この部分の強化を意識して活動したいと考えている。

（服部憲児）

『京都文教入門』から大学を変える、学生が変わる！

京都文教大学臨床心理学部 教授／共通教育担当 部長

平岡

聡

『京都文教入門』から、学生が変わる、大学を変える

京都文教大学

報告者 平岡 聡（共通教育担当部長）

村山孝道（教務課係長）

山田博貴（FSD学生メンバー）

はじめに

FDの義務化に伴い、各大学にFD委員会が組織されたり、またFD活動を担うセンターや機構を設置する大学も珍しくない。しかし、その数多の取り組みとは裏腹に、それに見合った成果がでていないかという、疑問視せざるを得ないのが現状だ。そこで注目されているのが、大学の主役である学生とともに進めるFDである。これにも様々な形態があるが、本学では大学によってオーソライズされていないまったくの有志草の根的FSD活動がどのように誕生し、またいかなる活動をしているかを第1部で紹介する。これを承け、第2部ではそのFSD活動の一つとして、自校史科目『京都文教入門』の授業改善を行ったが、それによってこの科目が実際にどのように生まれ変わったかについて、事例の報告をする。そして第3部では、本学のFSD活動に関わった学生の生の声を記載する。

第1部：学生とともに進めるFD

村山孝道（教務課係長）

1. FSDprojectとは

冒頭から登場する「FSD」というコトバ。大学人であれば普通FD+SD、すなわち教職協働でしょ？と答えるに違いない。しかし、本学のFSDの「S」はstaffだけでなく「student」がちゃんと入っているのが特徴だ。FDを「授業改善」という狭義でとらえるのではなく、大学改革や教育改革と捉え、「大学の総合力」を磨くことをFDと定義した時、そこには学生が単なる受益者ではなく、教職員と共に創り上げる「供給者」として存在していることを当然のこととして受け止めることができる。

しかし、「教・職・学協働」も近頃急速に大学人の中で浸透してきた。大学の活性化を学生と共にやるのは当然、という進んだ大学もあり、もはや教職学協働を本学のオリジナルとしてアピールできるようなものではなさそうだ。しかし、本学のFSDにはもう一つ大きな特徴がある。それは「有志・草の根」である、ということだ。FDを「有志・草の根」で、嬉々としてやっている。そんな大学はさすがにあまり無いのではないだろうか。



2. FSDprojectはこうして生まれた

2009年6月、ある学科の学科会終了後、「大講義室でおしゃべりをやめないときにどうやって

いるか」という話し合いをした、という情報が入った。そこで飛び出してきた手法が面白い。突然電気を消したり、自分のキャラと違う甲高い声で超早口にしゃべってみたり、天井を見上げて1分間黙りこくったり。「センセイも困っているなあ」と思うと同時に「これは良いネタになる」と思い、近くにいた顔見知りの学生や教員に声をかけ、卒業生が働く町家風小料理屋で「座談会」を開いた。話し合いは当初のテーマであった「大講義の授業改善」をあっという間に飛び越え、「どうすれば大学が元気になるか」「オモロイ大学になるか」という話題にいたって大いに盛り上がり、議論は3時間半に及んだ。普通ならそこで終わってしまうところであるが、参加者に学内広報紙を作るプロジェクトのメンバーがいたことから、「せっかくだから冊子を作ろう」というアイデアが出てきた。すると別の学生が「じゃあ私がテーブルおこしをする」と買ってでた。この学生たちのしがらみの無い自由な発想、3時間半ものディスカッションのテーブルおこしを（もちろん無償で）する、と即座に言い切る瞬発力、また、その学生たちの勢いに乗せられ、「ok、金は何とかする」と言った教職員の勢いがシンクロした。冊子を作るならもっとネタを作ろう、ということでさらに盛り上がり、他大学訪問、授業人気ランキングアンケート、研究室の行きづらさ研究、落書き調査などの企画が次々に作られていった。冊子のタイトルには「教・職・学協働」と「大学を変える（＝FD）」、の両方の意味を込めて「FSDマガジン」と名付けられた。こうしてFSDprojectは冊子作りから生まれ、当初5～6名の学生、2～3名の教員、1～2名の職員で動き始めた。

3. FSDprojectの活動内容

その後、活動の範囲はメンバーの好奇心と共にどんどん広がり、「京都文教入門」（詳細は後述される）に深くかかわったり、国際交流とFDの出会いも生み出した。活動の概要は下記のとおりである。

京都文教大学の FSD project

Point①

あくまで有志、草の根

Point② 活動

- ① イベントをする (ex; プロジェクトPRフェスタ)
- ② マガジン等を作る (FSDマガジン、文教Menu)
- ③ 「京都文教入門」にかかわる
- ④ 他大学に行く(ex; FDサミット、他大学探訪企画、大学教育学会)
- ⑤ 「しゃべり場」を開く

Point③ 組織

教員(F)・職員(S)・学生(S)の混合チーム
...他学科、他学年の学生、また教職員とも仲良くなれる

Key Words

- ・「生徒から学生へ」 一歩を踏み出す
- ・「大学を変える、学生が変わる」
- ・「学費以上」に京都文教を使い切る



京都文教のFSD年表

2009.6.10	座談会(今にして思えばしゃべり場) 於:京の町屋居酒屋
2009.12.4	他大学訪問・授業参観(佛大・立命)
2009.12.16	「京都文教入門の未来しゃべり場」
2010.2.20	学生FDサミット in 立命館
2010.4.9	〇京都文教入門2010スタート
2010.4.16	〇学科長対談「マンガ」
2010.4.23	〇学部長対談「恋愛」
2010.5.14	〇 FSD企画コマ(臨床心理学部) FSDマガジン、京都文教Menu刊行
2010.5.28	〇学科長対談「恋愛」
2010.6.4	〇学部長対談「マンガ」
2010.6.6	大学教育学会 in 愛媛大学
2010.6.25	〇 FSD企画コマ(人間学部)
2010.6.28	他大学訪問 京都大学 桂
2010.6.30	〇プロジェクトPRフェスタ2010
2010.8.28	学生FDサミット in 立命館
2010.11.24	「京都文教入門しゃべりば」
2010.12.15	「国際交流しゃべり場」
2010.12.18	「IWAの会」 in 京都文教
2011.3.5	FDフォーラム in 京大外大
2011.3.XX	FSDマガジン№2 発行予定

活動のポイントは全部で6つある。

- ① イベントをする
- ② マガジン等を作る（FSDマガジン、Bunkyo Menu）
- ③ 「京都文教入門」にかかわる
- ④ 他大学に行く（FDサミット、大学教育学会、他大学探訪企画等）
- ⑤ 「しゃべり場」を開く
- ⑥ 国際交流とかかわる

上記①「イベントをする」と③の「京都文教入門にかかわる」、については後述されるのでここでは割愛する。

②の「マガジン等を作る」はFSDマガジンとBunkyo Menu作成の二つがある。FSDマガジンは、全て実名寄稿による冊子であり、委員会や組織の検閲が全くないことが特徴だ。また、寄稿者の名前には、よくありがちな役職や所属、学年等はつけられておらず、あくまで「教員・職員・学生」の三択で記されているのも特徴だ。これは、大学には教・職・学の三者しかいないというあたりまえのこと、そして、その三者に上も下もない、ということをメッセージとしてふくませているのだ。3月に第2号が発行される予定である。FSDprojectの活動成果の落とし込みどころであり、同時に、冊子への掲載を目的に新規企画が生まれる等、冊子創り自体が活動の大きな動機付けとなっている。BunkyoMenuはその名のとおりに、京都文教大学で学生たちが「使え」そうな「もの」や「こと」を集めた冊子だ。「京都文教を学費以上に使う」ことを目的にした「京都文教入門」という自校史教育科目の教材として開発した。この教材を使い、教員だけでなく学生や職員が実際に教壇に上がり、授業の一コマを担った。

④の「他大学に行く」では、活動開始当初に冊子のネタづくりのために佛教大学と立命館大学を訪問した。この時の立命館大学の木野茂先生と出会い、そして先生の授業を参観させていただいたことは後のFSDprojectに大きな影響を与えることになった。その後は、学生FDサミットと大学教育学会への参加がこの企画の柱となりつつある。なお、学生FDサミットへの参加は、新規メンバーの獲得に大きな役割を果たしている。また、初回からお世話になっている学生FDサミットでは、これまで毎回発表校に選んでいただき、メンバーの「他流試合」の良きステージとなっている。

⑤「しゃべり場を開く」は、まだまだこれからの企画であるが、これまで学内で2度開催した。昨年12月には、⑥の「国際交流とかかわる」のきっかけとなった国際交流しゃべり場「留学が変わる、〇〇を変える」を開催した。「留学とFD」という一見全く異なるようだが、実は非常に相性の良い二つのテーマは参加者に変大好評を得た。

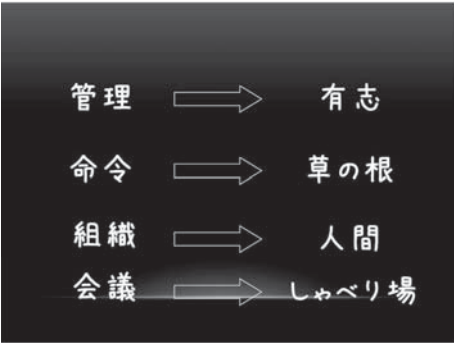
4. 何故「有志・草の根」？

業務としてのFDや大学改革は、「お上のお達し」「義務なのではない」「アリバイ作り」「重苦しい会議」「管理する側・される側」「プレッシャー」「評価や管理」などなど、ネガティブな用語をあげるとキリがなく、前向きで楽しいものとは言いがたい。「勢い」で生まれたFSDproject。それを「学生と協働でやるFDが正しく、義務やアリバイ作りでやるFDはインチキだ」と言って学内で認めさせ、組織化して「権利を勝ち取る」というムーブメントもありえたのかも

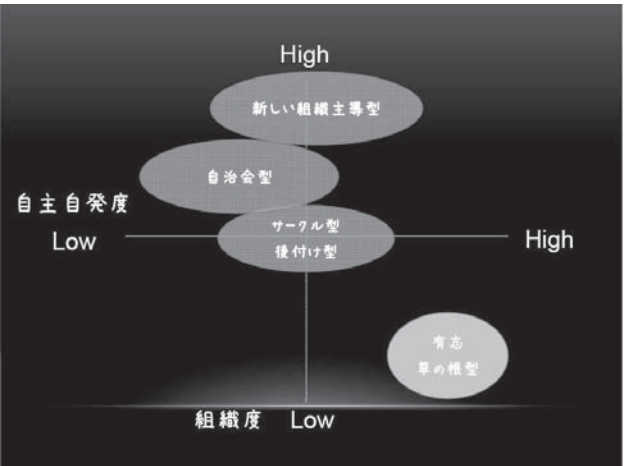
しれないが、初期のメンバーはそのようなことにエネルギーを使う意識が全くなかった、というのが正直なところであろう。それよりも、今できること、やりたい事をとにかくやる、という指向性の人間が集まっていた。「出来ないこともたくさんある、でも出来ることも山ほどある」という発想である。ただし、この時メンバーと共有したことがある。それは、

- ① コソコソしない
- ② 目に見える成果上げる
- ③ 成果を惜しみなく大学に還元する
- ④ その代わりお金はちゃんと公費を使う

というものである。FSDは大学を良くすることであればどんなテーマでも取り扱うことができる、ある意味大学で最も大きな風呂敷である。特に、組織に属さない「有志・草の根」であるがゆえに扱えるテーマは広大だ。その意識を持つためにも決してコソコソしてはいけない、大学の中心にいる、という思いを共有した。具体的には、活動の報告をFSDマガジンだけではなく、大学の公式広報紙や、学園全体の学内広報誌に掲載したり、教職員のメイリングリストで全教職員に対し活動の予告と報告を頻繁に流す、ということを行った。そのようにして権力を力で勝ち取るのではなく、成果を積み重ねることによって現在はそれなりに「市民権（認知度）」を得るに至っている。活動に必要な資金は、主にはFD業務を所管する教育支援課から協力を得るが、その他に国際交流室や学生課、共通教育費などから協力を得、代わりに成果をそれぞれの部署に還元している。このような活動を通してFSDprojectはある特定の部署に属してある限られたテーマを取り扱っているのではない、ということのアピールしている。時には学長に決裁権のある学内の競争的資金にプレゼンをして資金の獲得を行うこともある。手弁当、ボランティアで行わずに、少々手続きが煩雑であっても金額の大小に関わらず公費を使うのは「どこかの誰かが何かをやっている」ということではなく、堂々と「大学の中心」で活動を行う上で重要であると考えている。



「有志・草の根」のFSD活動は確かに前述のように「できないこと」はたくさんある。他大学のように組織の後ろ盾や、活動のための部屋もない。しかし、始めようと思えば明日からでもすぐに始められ、また意外と「できること」は山ほどある。なかなか学生と共にすすめるFDが学内で認められない、というような大学にはおススメの方法かもしれない。ただし、吹けば飛ぶような「有志・草の根」の活動であるが故、テーマ選びと進め方には細心の注意が必



要だ。極めて「前向き」そして「楽しく」なくては定着しない。

「有志・草の根」には「やらなくてはいけないこと」は一つもない。そして「やりたいこと」は山ほどある。何かを勝ち取る必要が無いので、例えば組織の上層部に対して苦情を言う必要が全くなく、よってメンバーが精神衛生上至って健全なもの「有志・草の根」の良いところだ。したがって「組織力」は極めてあやふやだが、「自主自発度」だけは極めて高く、一言で言うと元気だ。

5. 「教・職・学協働」とFSD

さて、今回のミニシンポジウムでは参加者のうち約40名、全体の30%が大学職員であった。大学職員という職種の特徴・特殊性とは何か、と考えたとき、それはそこが「教育の現場である」とことと「学生がいる」という2点に尽きると思う。その中で「大学職員力」を考えると、それは「教育の現場で」「学生と一緒にあって」、「なにやら前向きでクリエイティブなことをやっていく力」である、といえるのではないだろうか。教室の中での教育は教員の仕事であるが、大学という「場」には教室以外にもたくさんの教育的活動が行われている。教室外での教育活動、学生の成長を促す様々な仕組みには職員も参加ができる。学生とともに進めるFD（大学改革）はまさに「大学職員力」を問われ、また発揮できる仕事であるといえよう。「教職協働」の重要性は語りつくされているが、二者が協力するとき職員が一步を引いてしまう、遠慮してしまう、ということがよくある。しかし、そこに学生という第三者が入ることで教職協働がスムーズに進む、ということもあるのではないだろうか。学生参画FDを進めることは職員のSDを進め、「教育現場」でより主体的に大学職員としての仕事を行うきっかけとなるのではないだろうか。

職員が「裏方意識」を捨て、教員も職員を「裏方使い」することをやめ、職員を裏から表に引っ張り出し、「裏も表も」一緒になってやって初めて真の教職協働が生まれる。「職員さんの協力なしでは」とか「職員さんの協力を仰ぐ」ということでは真の教職協働は生まれない。学生と共に進めるFDを通じて、職員を裏から表に引っ張りだし、ステージの中央に立たせてみてください。「教育という現場」で働く意味を実感した職員が増えればおそらく教員にとってもこの上なく強い味方となるのではないだろうか。

第2部：『京都文教入門』（初年次必修）から変える、大学を変える

平岡 聡（共通教育担当部長）

では次に、本学FSDprojectの活動の一つとして、ある一定の成果を上げた授業改善の事例を報告する。本学では2010年度に共通教育科目の全面改定が行われたが、それに先だって、2009年度に自校史教育科目である『京都文教入門』がスタートした。これは本学および本学が存在する京都・宇治のことを学ぶことで、新入生が大学や地域に愛着（アイデンティティ）を持ってもらうことを意図し、新入生必修科目（前期）として設置された。内容は、大きく三つの柱からなる。一つは＜大学入門＞（7コマ）であり、ここでは学園長・学長・学部長・学科長がオムニバスで授業を担当し、学園長は建学の精神、学長は大学が阿設置された経緯、また学部長や学科長は自分の所属する学部や学科について話をするという内容である（普通、自校史科目と言えば、その大学の歴史を中心に語るものが多いが、本学は学園としては100年の歴史を持つものの、大学は

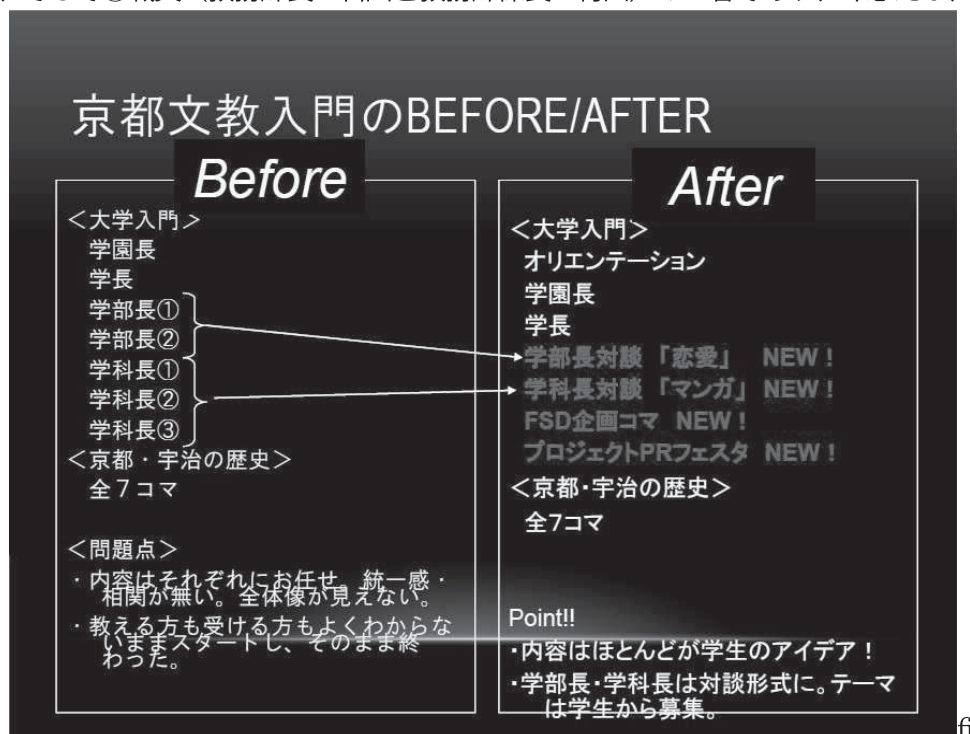
できてまだ15年の歴史しかないので、その内容は自ずと大学自体の教員や学部学科の紹介となる)。

もう一つは<京都・宇治の歴史> (7コマ) であり、こちらは非常勤講師に依頼し、歴史的な観点から京都や宇治紹介するという内容である。またこれとは別に、一回だけ、本学や京都に縁のある著名人を講師に迎えての講演会を実施する。これは、その道で成功をおさめた著名人の体験に耳を傾けることで、新入生にやる気を鼓舞することを意図している。

この科目をプロデュースした私としては、それなりに当初の目的を達成するものと気楽に構えていたが、蓋を開けてみると、豈図らんや、学生からは不満の声が続出した。また担当した教員からも、何をしゃべっていいかわからないという指摘もあり、さらには職員からも「学生の評判は悪いですよ」と囁かれる。

翻って考えてみると、確かに準備不足のままスタートしたため、全体のコーディネートがとれていなかった。また大学入門に関しては、話す内容を担当教員にお任せしていたので、統一感や相関がまったくなかった。これでは教員の側も学生の側も、この授業自体が何なのかを分からないまま、時間だけが虚しく過ぎたということになる。

後期に入り、次年度の『京都文教入門』をどう運営するかについて心配してくれた教務課職員は、とにかくアンケート調査を実施して現状を把握し、またこの年度に本科目を受講した新入生の有志を募って意見を聞いたかどうかという話になった。そこで早速アンケート調査を実施し、その中で有志も募ったが、応募してくれたのはたったの1名(この学生は怒りに燃え、何か一言苦言を呈さねば気が済まないという強者だったが、その後FSDのメンバーになっている)であった。もう少し人数がほしかったので、後は建設的な意見を出してくれそうな学生を数名一本釣りで集め、「京都文教入門の未来をまじめに考える会」を開催した。そこに集まったのは、①受講を終えたばかりの新入生有志と先輩学生(FSDメンバー)、②教員(共通教育担当部長として私本人)、そして③職員(教務課長・石田と教務課係長・村山)の三者であり、今思えば、教職学



のシナジーがここで生まれていた。

水曜日のお昼休みと3時間目（本学では「指月アワー」と称し、水曜日3時間目にアッセンブリーブリーアワーを設け、授業を入れずに、課外の活動に使えるようにしている）を使って、昼食を食べながら、次年度の内容について熱く討議をした。その結果、学生から建設的な意見がだされ、京都文教入門は次のように新たに生まれ変わったのである。

まず、全体の統一感をはかるために、第1回目の授業で、この授業の狙いや目的を説明し、また「生徒」と「学生」の違い、また高校までと大学での学びの違いについて私が話をし、大学生としての自覚を促すことで、全体のオリエンテーションを行い、授業の見通しをつけた。大学ではしっかりと他者の話に耳を傾けることも重要なので、学園長と学長の話に関しては従来どおりで据え置いた。

次に学部長と学科長が単独で個別に話をしていた部分だが、これを対談形式にした。狙いは、大学教育で重要な複眼的思考を促すことにあった。つまり、同じテーマでも学問領域が違えば、ものの見方も異なることを学生に伝えたかったのである。またそのテーマも、初回の授業でアンケートをとってテーマを募集し、人気の高かったテーマ（「恋愛」と「マンガ」）を取り上げた。こうして、私が司会を務め、あるテーマについて、学部長（人間学部臨床心理学科）、あるいは学科長（文化人類学科・現代社会学科・臨床心理学科）がそれぞれの学問からそのテーマに切り込み、また対談を通じてその問題の理解を深めた。

この授業では、毎回、その授業の満足度を学生が記入するようになっているが、これらの改良を加えてもなお、まだ教員が登場するときの満足度は高いとは言えず（4割から5割）、学生が表に出るとき満足度の方が高くなっている（6割前後）。そこで次に、学生

京都文教入門 学部長対談 本日のお題「恋愛」

現代社会学科 教授 松岡富亮
現代学・社会学

社会学

社会学とは、社会の構造や機能を理解するための学問です。社会の構造や機能を理解することで、社会の発展や変革に貢献することができます。

臨床心理学科 教授 岡田康弘
心理学・臨床心理学

臨床心理学

臨床心理学とは、人間の心理や行動を理解するための学問です。人間の心理や行動を理解することで、人間の生活や社会に貢献することができます。

日時：2010年4月23日（金）5限
場所：G101

京都文教入門の第1回、3学部長による対談と2学部長による対談があります。目的は、一つのテーマについて、それぞれの学問からそのテーマについて話し、そのテーマについて理解を深めることです。また、それぞれの学問からそのテーマについて話し、そのテーマについて理解を深めることです。

本日の対談は、現代社会学科の松岡富亮教授と、臨床心理学科の岡田康弘教授による対談です。対談のテーマは「恋愛」です。対談の内容は、恋愛の心理や行動について話し、そのテーマについて理解を深めることです。

FSD企画コマ 感想

- ・大学を活用する方法がこんなにあるとは知らなくて驚きの連続でした。
- ・今までの文教入門のどのコマより面白かった。すごく刺激を受けて「何かを始めてみよう」と思った。
- ・初の試みとは思えないほどしっかりしている。
- ・知らないことだらけだったので一歩踏み出すきっかけになりそう。
- ・自分と近い年齢の人がやっていることに刺激を受けた。
- ・小さい大学だからこそできる事がたくさんあるんだと気づかされた。
- ・発表する人、聞く人、両者にメリットのあるすばらしい企画だった。

が中心に登場する「FSD企画コマ」と「プロジェクトPRフェスタ」について報告する。

まず「FSD企画コマ」だが、ここではその名のとおり、FSDのスタッフが企画した授業で、本学にあるリソースを一冊の冊子にまとめ、それに基づいて、「広く、浅く、全部見せる」というキーワードのもと、本学の施設や本学の課外活動・プロジェクト活動を紹介した。

開学して15年という短い歴史ながら、各部署において様々な施設や活動が行われてきたが、それの一つに集約するという作業は行われていなかったもので、これを機にそのばらばらの情報を集約し、「Bunkyo Menu」（FSD project 制作）というパンフレットを作成できたのも、副次的に大きな収穫であった。これにより、「もっと早くそれを知っていたら、活用したのに」という学生を一人でも減らす効果があったと考えられる。

この回はかなり学生の評判もよく、次のような感想が寄せられた。

プロジェクトPRフェスタ2010 感想

- ・本当に「フェスタ」みたいでとにかく楽しかった。最高でした！
- ・このPRフェスタによって、大学で行われている様々な活動について知ることができた。
- ・学生がいろいろ企画したり、自分たちの活動をPRしたり、すごいと感じた。
- ・どのプロジェクトも熱が入っていて、とても楽しそうだった。見ているこちらでも盛り上がって楽しかった。
- ・ステージの演出、雰囲気めっちゃおもしろく、今後もこの企画を続けてほしいと思った。
- ・文教にもおもしろいイベントがあることを誇りに思う。

最後に、最も満足度の高かった「プロジェクトPRフェスタ」の内容を紹介する。これは「広く、浅く、全部見せる」という「FSD企画コマ」とは対照的に、「狭く、深く、よく見せる」をキーワードにして、本学を「学費以上」

に使い切っている先輩学生の渾身のプレゼンテーションを中心に行われた。まずはプロジェクト活動をしている（あるいはこれからやろうとしている）団体・個人を募集すると、全部で13の団体がエントリーしてくれた。これでその内容は決まったが、問題は「これをどう見せるか」である。

教員と職員、それにFSDのメンバーが集まってミーティングを重ねたが、最初は「課外活動発表会」という名称で企画を考えていたため、参加者のテンションは一向に上がらない。必修科目のため、興味もない、聞きたくもない500名の新入生に対して「課外活動発表会」では、いかにも「しょぼい」感は否めない。

そんな時。一人の職員が「フェスタ」という言葉を口にした。その瞬間、滞っていた水が一気に一点に向かって流れ出す。言葉とは不思議なもので、「○○○発表会」が「○○○フェスタ」に変わるだけで、思考のディメンションが一新される。どうみても、「○○○フェスタ」の方が楽しそうだ。企画する方も楽しくなければ、アイデアも出てこないし、企画する方が楽しくなければ、それを見る方も楽しいわけがない。

というわけで、職員の発した「フェスタ」という言葉から参加者のテンションは一気にトップギアに入った。これにより、オープニングをチャリダー頼むこと、プレゼンテーションの変わ

り目にはボクシングのタイトルマッチよろしくラウンドガールが登場すること、また音響や照明は「ステージプロデュース」という課外活動をしている学生に依頼することなどが決まった。当日はまさに「フェスタ」という言葉に違わぬ盛り上がりを見せ、企画した学生も、プレゼンテーションをおこなった学生も、またそれを見た新入生も、この90分を大いにエンジョイした。それは次に示す新入生の感想を見れば一目瞭然であろう。

こうして、学生の参加により、一定の改善が見られた『京都文教入門』だが、これを「シナジー」という観点から振り返り、まとめとする。

先ず第一のシナジーは、FDとSDのシナジー、より正確には「教員・職員・学生」の三者のシナジーである。教員は「教えて楽しい」、職員は「働いて楽しい」、そして学生は「学んで楽しい」大学をそれぞれ望んでいる。だが、三者がばらばらに思考しては、それを具体的に形にすることは難しい。今回は「楽しい」を共通項に三者が結びつき、『京都文教入門』という授業改善に向けてシナジー効果を発揮できたし、また一定の成果を生み出したと言える。

従来の大学教育で、教育に直接関与するのは教員だけであったが、これからの大学は教員の教育力はもちろんのこと、職員の教育力、さらには学生の教育力を加えた総合力で勝負しなければならないだろう。職員には教員にない社会性や実社会での経験知があり、学生の教育に貢献するところ大なるものがあるし、また学生にとっても「教える側」に立つという経験は学びの効果を大幅にアップさせ、自己の成長を促す大きな要因となるだろう。

第二のシナジーは正課と正課外のシナジーである。今回、教職学の三者で創成した『京都文教入門』の「FSD企画コマ」と「プロジェクト科目PRフェスタ」では正課の中で正課外の活動を紹介し、学生を正課外の活動にも参加するようエンカレッジした。3月5日に行われた「組織的FDの取り組み」でシンポジストの山田剛史が指摘していたように、正課と正課外の活動に正の相関関係があるとすれば、学生の間力を涵養する上で、正課外の活動が担っている役割は大きいと言えるし、またそうであるならば、正課の中で正課外の活動を紹介し、学生に課外活動を奨励することも意味のあることと言えるのではないか。

最後に、今回の活動の課題と展望を述べてこの報告を閉じたい。報告後の質問にもあったが、今回は『京都文教入門』のうち、＜大学入門＞の改善だけで終わってしまい、＜京都・宇治の歴史＞は手つかずとなった。理由はこの部分を非常勤講師に依存していることがある。こちらに関しても学生の不満は多々あり、既述の「京都文教入門の未来をまじめに考える会」で問題点を指摘し、改善点を何点か箇条書きして、担当の先生にお渡ししたが、あいにく本務校の関係で、次年度は非常勤講師を辞退され、担当者が変わってしまったため、その改善点は生かすことができなかった。

すでに指摘したように、本学のFSD活動は組織化されていない「有志・草の根」活動である。本学もご多分に漏れず、教員と職員から成る「FD委員会」は組織されているが、本質的な問題の周囲をぐるぐる回っているだけで、なかなか前に進まないのが現状だ。しかし、この草の根活動が「下から」じわっと市民権を獲得し、「上から」じわっと降りてきたFD委員会の活動と出会ったとき、それは大きなシナジー効果を発揮するのではないかと淡い期待を抱いている。今はとにかく、できる人ができることをできる範囲でやるだけである。

第3部：京都文教FSDメンバーのナマの声 in FDフォーラム

山田博貴（FSD学生メンバー）

私がFD活動を始めたきっかけは、昨年の夏に立命館大学で行われた学生FDサミットに参加したからである。その時は、FDがどういうものかよく分からず、友人に誘われ、「大学を学生が変える」というテーマに興味を持ったのと、ディスカッションが好きという理由で参加した。実際に参加してみて、全国色々な大学生や教職員の方々としゃべり場を通して意見交換や交流を深め、互いの大学の教育方法や不満について話すことができた。京都文教大学と他大学との相違点、共通点を知ることと、改めて自分の大学の良さと足りなさの両方を感じることができた。サミットは交友関係も広がったり、視野が広がったりなど、自分の人生が大きく変わった出来事であった。

サミットが終わってから、正式に京都文教FSDに加入し、学内のしゃべり場企画の手伝いや、他大学交流をしに行ったり、つい最近ではFSDマガジンNo.2の作成で、大学職員にインタビューする記事に携わったりした。今後は、新入生向けの講義である京都文教入門の内容を考えたり、イベント企画であるプロジェクトPRフェスタの企画に携わったりしようと思っている。そして、京都文教FSDのブログを作って、日々の活動を書こうと思っている。

以 上